

東亜同文書院記念基金会ニュース

第16号

2014年4月～2015年3月



Contents



- 第21回 東亜同文書院記念基金会授賞式 —02
- 東亜同文書院記念基金特別奨励賞・栄誉賞授与 —10
- 書院の皆さん、今に思いを語る —11
- 本間先生欽慕の会・根津山洲先生墓参・荒尾東方斎先生墓参 —24
- 東亜同文書院大学記念センター活動レポート —26
- 「東亜同文書院関係の史資料収集とコレクション紹介」 —32

第21回東亜同文書院記念基金会授賞式

第21回東亜同文書院記念基金会授賞式が2014年1月28日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第21回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第21回となる今回は、記念賞として北川文章氏が、功労賞として仁木賢司氏が選ばれました。

〔記念賞受賞者〕

北川 文章 氏

昭和21年東亜同文書院第46期より愛知大学法経学部へ転入学、卒業され、その後霞山会理事長、愛知大学理事として日中間文化、留学生交流事業の推進に注力され、日中間の相互理解に尽力された。

また、中国上海交通大学と霞山会、愛知大学との戦前戦後に亘る史実研究会事業を立ち上げ、東亜同文書院及び書院卒業生の中国での名声の向上と相互理解増進に多大な貢献をされた。

〔功労賞受賞者〕

仁木 賢司 氏

アメリカ、コロンビア大学でライブラリアンの道を歩まれ、のちにアメリカにおける日本研究のセンターであるミシガン大学にて、世界に誇るアジアンライブラリーの代表として活躍される一方、アメリカにおける東亜同文書院関係の文献、資料を収集され、アメリカでの東亜同文書院研究への確固たるベイスをつくられた。また、それらの情報を愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催の国際シンポジウムなどでたびたび講演され、東亜同文書院研究のグローバル化に多大な貢献をされた。

〔授賞式挨拶〕

佐藤 元彦 氏

（東亜同文書院記念基金会会長・愛知大学学長）

この場をお借りして、本日の第21回東亜同文書院記念基金会記念賞ならびに功労賞の受賞に際しまして、一言ご挨拶をさせていただきますと思います。

まずは北川様、仁木様、本当におめでとうございます。あわせてこの間、東亜同文書院関係の研究、あるいはその実績をベースにした日中間の交流、さらには世界平和にご貢献いただいたこと、心から顕彰しお祝いをさせていただきたいと思っております。先ほどの表彰状の文言の中にもございましたけれど



も、北川様におかれましては東亜同文書院から愛知大学への架け橋という点で大きな足跡を残されただけではなく、そのことをベースに日中間、さらには世界の平和へのご貢献をされたということが大変高く評価をされました。私、実は北川様が愛知大学の理事をされていた時に経済学部長だったと思うのですけれど、理事会に同席をさせていただき、その類まれなるご献身に大変に感銘を受けた記憶をまだ鮮明にもっているところでございます。色々とお教えいただいたことをこの場をお借りして改めて感謝を申し上げますと思いますし、本日の受賞を重ねてお祝いを申し上げたいと思います。仁木様におかれましては、これも表彰状の文言の中にございましたけれども、東亜同文書院研究をいかに愛知大学を超えさらには日本を超え、日中間を超え、そして世界の中で位置づけるといふ、そういう必要性の中で、特にアメリカにおいて大変なご貢献をされたというふうな認識をしているところでございます。ご案内の通り、現在東亜同文書院大学記念センターは文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として認定され、今年はこちらで5年の内の中間年にあたるわけでありまして、けれど、昨年の秋の中間評価を経てあと2年間この事業を展開していくということが予定されております。その中の一つのポイントがやはり東亜同文書院を国際研究という観点から研究を行っていく、その体制を確立す

ることが一つの大きなポイントであるところと解しているところでございます。その意味ではアメリカを中心とした仁木様のご貢献、これは本学のセンターにとつてはなくてはならないことでございますし、今後ともそういう意味では仁木様のご貢献が本学での研究にとつて必要不可欠であると認識しているところでございます。この機会にお二人にぜひお願いをしたいのは、今回表彰させていただきましたがさらに東亜同文書院大学記念センターの研究を発展させるために引き続きご協力を願いたいということです。簡単ではありますがありますけれども、お二人の受賞を心からお祝いを申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

〔記念賞推薦の辞〕

星 博人 氏(霞山会常任理事)

皆さん、こんにちは。本日は当会の日野西理事長が病氣療養中のため本会に出席できず、私が代理として出席してご挨拶申し上げます。皆様方のご了承ということになりました。皆さん方のご了承をお願いします。今回の東亜同文書院記念基金会記念賞、北川様、仁木様、お二人とも受賞されました心からお祝い申し上げます。と思います。基金会理事会の会長及び理事の皆様方のご了承をいただいて霞山会の推薦で本日までたく授賞式開催となりました。



北川様につきましてはほとんどの方がご存知だと思うのですが、敢えてご紹介したいと思います。さきほど佐藤会長からも表彰の際に北川氏の履歴についてはご紹介したかと思ひます。昭和21年、46期の東亜同文書院より愛知大学、当時法経学部に入學され昭和26年に卒業となります。愛知大学卒業後は山一証券株式会社に入社され同社の副社長を経て山一土地建物の社長、会長に就任されました。霞山会では平成14年の4月に理事長に就任され、理事長在任中は愛知大学の理事も兼任されておりました。愛知大学と上海交通大学はご存知の通り東亜同文書院史実研究会を事業として立ち上げ約3年交流を実施いたしました。こちらにいらつしやる滬友会の皆さん、愛知大学、または東亜同文書院大学を卒業された皆さん方に対しても上海交通大学の先生が訪日し、インタビューされたことは皆さま方の記憶に残っているかと思

います。北川氏は交通大学の先生方との密接な人脈を活用され、調査事業の実施に貢献されたわけであります。当初上海交通大学はこの史実研究につきましましてはむしろ後ろ向きで、前向きではなかった状況にありましたが、北川氏のおかげで東亜同文書院に関する多くの地域資料が発掘され、画期的な事業と評価されたという経緯があります。画期的な事業とおっしゃったのは、ここにおられる東亜同文書院をよくご存知でいらつしやる藤田佳久先生でございます。本事業を契機に中国、国内以外でアメリカ、香港、台湾を含めて色んな資料が発見されたと聞いております。そういう意味では北川先生は大いに貢献されたと思っております。余談ですけど、山一証券在任中を含めて北川氏は日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力なされ、この間、中国の上海交通大学より顧問教授に委嘱され就任しています。それと同時に浙江大学からも顧問教授に委嘱され現地に出張し、経済分野の教科を担当され、ご活躍なされたと聞いております。また、揚州大学の名誉教授の称号も授与されております。なお、霞山会以外の財団法人の日中文教協会では、日中間のいわゆる文化交流より教育関係の交流を主体とした日中教育協会という組織の理事にも就任され日中教育交流に多大な貢献をなされました。そういう意味で北川氏の企業における尽力、愛知大学、霞山会での実績を勘案し、今

回の東亜同文書院記念基金会記念賞の受賞を推薦し、基金会の理事会で承認をいただいた次第でございます。以上、報告でございます。簡単ですが私の挨拶とかえさせていただきます。ありがとうございます。

〔受賞挨拶〕

北川 文章 氏

北川でございます。今回こういかたちで授賞式を開催していただき、諸先生からは過分なお言葉をいただいております。私としては思ってもいなかっただけに、誠に有り難く存じておりますが、果たしてそれに値するのにかいさきためらいも感じております。

最初に、私が霞山会にお世話になったきっかけから話をさせて頂きたいと思っております。あ



る日突然に同文書院で10期先輩にあたる渡辺さんから電話があり、「近く常任理事を退任する予定だが後任をやつてもらえないか」とのことでした。それまでの私は霞山会とは格別の接点もありませんし、理解も薄かったと思います。それだけに唐突なお話しでしたし、たまたま長年勤めた仕事からリタイアした直後で、家族から「まだ仕事をするの？」といわれる状況でしたので、即答出来ず迷つておりました。そんな直後に、丸紅の春名和雄社長（故人）と、ある会合で偶然お会いする機会がありまして、その時に、多分自分のリタイアの挨拶をしたのだと思いますが、「長い間ご苦労だったね。ところでもう一度霞山会でやってみる気はないか？」と意外なお誘いを受けてしまいました。後になつて考えてみますと、春名さんと渡辺さんは同文書院で同期ですし、当時滬友会（同文書院の同窓会）の会長と霞山会の理事を兼ねておられましたので、あるいは、お二人の間ではお話があつたのかも知れません。いずれにせよ日ならずして大先輩の二人からのお話です。無下には断れませんでした。こんなきつかけで霞山会に入り、10年程続いたのでありますが、いざ入ってみると、外から予想していたのとは実態が異なることも沢山ありました。霞山会は東亜同文書院の流れを汲む財団法人です。歴史的背景や環境が違うといつてしまえばそれまでですが、志向する方向は同じでも、財産運営の在り方一つを

とつても違っていました。同文会の方は、義和団事件、いわゆる義和団賠償金や外務省からの補助金等に依存して運営されていた、それに対し一方の霞山会は自らの稼ぎで、所有する霞山ビルからの、いわゆるテナント収入で賄わなければならないという、自力更生型の特異な経営形態なのです。それだけに主体性は確保されていましたが、常に景気動向に左右されます。私が就任した頃は、すでに日本経済も高度成長の時代は終わり、調整局面に入っていました。比較的立地条件に恵まれていた霞山会とて例外ではなく、テナント収入にも陰りが始めていました。すでに神戸大震災から一年過ぎていましたが、全国的マイナスイメージは現実味を帯びつつありました。テナントからビルの耐震性についての懸念の声も出て参りました。竣工当初から関わっていた技術者を呼んで対策を協議することもしばしばでした。専門的な調査結果も霞山ビルは地質も良く、建物も堅牢であることから差し当たり問題はないとのことでしたが、なにぶん竣工から30年余り過ぎています。当時新築高層ビルの竣工も多くなり、競合に晒される場面も増えていました。買い手市場に変わっていたのです。テナントを納得させるためには、目に見えるかたちの対応が必要になってきました。それには大幅なりフォームか建替えが必要だというのです。何を選ぶにせよ大きな経済負担です。理事会にも何度か対応策を諮りましたが簡単には結

論の出ない課題でした。そうこうしている最中、霞山会（霞山ビル）も含めたこの地域が、いわゆるPFI事業の第一号に選ばれることが伝えられました。小泉内閣財政運営の目玉として急にクローズアップしてきたのです。これは霞山会にとつてはまたとないチャンスです。当時抱えていた諸問題も一挙に解決できると考えました。しかし、当初は声ばかりで具体的な絵はなかなか示されません。最初の説明会に出席しましたが、各々「官庁様相」でして、これでは主務官庁が何処かさえ明確ではありません。相談しようにも術がありませんで段々不安が募りました。しかし、時間の経過と共に意外と早い展開となりました。結局このプロジェクトに参加できたのは、民間側は霞山会単独（副に住友不動産）となりましたが、政府側も第一号に相応しい対応でしたし、応札したゼネコン等の民間の関係者も多岐多様でしたが、霞山会に対しては非常に協力的でした。換言すれば、霞山会は運が良かったとも言えます。すでにビル本体、関連施設と共に立派に完成しております。役割を果たした霞山ビルは予定通り壊され姿を消しました。色々曲折を経てのことでしたが戦後の推移に限って見ても1940年代に遡ります。霞山ビルが建てられたこと、これに関連した方々の功績に集約されましょう。まず、底地を政府から払い下げを受け、当時の制約の多い条件の下で霞山ビルを完成させました。その当時の方々のご苦勞が

あつての今日の結果です。今となつては、関係者は総て鬼籍に入つておられますが、この方々に改めて敬意を表すべきだと考えています。

先程、星さんから、私と中国、上海交通大学等との関係についてご紹介を頂きました。私は公式に1990年に交通大学から招かれ、以来もうかれこれ2、30年近く経ちました。当時から色々ご指導を頂いた交通大学側の諸先生とは、今もお付き合いを続けております。お互いに年をとりましたが、心底老朋友と思つております。政治的には日中間は依然厳しい状況が続いておりますが、そんなことは私たちには関係ありません。何でも腹を打ち明けて話が出来るように思います。要は事に当たつて相手の目線で物を見、物を考えることだと思ひます。勿論簡単なことではありませんが、お互い相手を尊重する気持ちがあれば自然に出来ることだと思ひます。只、避けねばならないのは、思い込みで相手を律することです。最近双方の国からの観光客も急増しているとか、お互い相手を知りたい機会だと思ひます。

話が長くなりましたが、私が霞山会を退任して早いものでかれこれ9年近くになります。その時と前後してお亡くなりになりました中江要介さんのお話をして終わりにしたいと思ひます。中江さんは、駐中国大使を務められた後、霞山会の理事として来られました。私も在任中何かとご指導を頂いたことも

あり、私が退任のご挨拶状を出した際に、非常に丁寧な返事を下さいました。その中で、「霞山会は恵まれた財団だ。霞山会でなければ出来ないこと、霞山会だから出来ることを忘れずに、色々精進してもらおうといいな」と述べておられます。中江さんはその後間もなく亡くなられましたが、今も私はその手紙を大切に保管しております。

最後になりましたが、同氏を偲んで触れさせていただいた次第です。今回は色々ありがとうございました。

「功労賞推薦の辞」

藤田 佳久 氏（愛知大学名誉教授）

ただいまご紹介いただきました愛知大学名誉教授の藤田と申します。どうぞよろしくお願い致します。北川先生、仁木先生、受賞大変おめでとうございます。後ほど仁木先生のご紹介をします。その前に、北川先生のこれまでの東亜同文書院大学記念センターとの関わりみると、大変多くの功績を我々に残していただきました。特に我々と上海交通大学の間で初めての歴史的な史資料に基づく研究というのを可能にいただきました。中国の社会科学系の研究者の研究は、多分にイデオロギー的で、これは研究かと思うようなものも非常に多いんですけども、この時は共通の歴史的な史資料に基づいて研究することを条件にして実現しました。そういう点

では我々にとって大変ありがたかったし、中国の研究者にとっても非常に斬新な研究ができたのではないかと思います。そういうきっかけを北川先生に作っていただいたという点で、我々の方も大変敬意を表したいと思っております。

私の役割は仁木先生の方でございまして、本月初めてお目にかかった方が多いと思います。仁木先生はアメリカのコロンビア大学およびセントジョーンズ大学、そして日本研究では、先ほど学長が申しましたようにアメリカの日本研究センターがあります。ミシガン大学の図書館において、アジアライブラリーのヘッドとして日本キュレーターとして活躍されました。アメリカの図書館での司書の方々はですね、日本に比べますと非常に図書に関する研鑽と功績があり、その地位は非常に高いのです。日本でいうと教授職に該当



するほどのポジションにあります。

特にアメリカにおける仁木先生の評価を申し上げますと、ミシガン大学では、アジア関係書、日本書など毎年数千冊程度収集されているという記事がありますが、それらとともにその中でも東亜同文書院関係の文献資料も精力的に収集され、院生を含む研究者への提供や指導、講演などを経て、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースを作られました。その専門性に裏打ちされた知識と丁寧な指導により、仁木先生の名前は全米のライブラリアンにも広く伝えられております。

2011年にミシガン大学を退職する際は全米ならびに国際的な各種組織や委員会の構築、そしてそこでの活躍、また日本ライブラリーの発展に対する謙虚な功績を称え、ミシガン大学学長より『名誉ライブラリアン』の称号が与えられました。この称号を授与される方は非常に少ないとのこと。また、愛知大学との関わりは、2005年に本学図書館にてアメリカの図書館事業に関する講演をいただき、そこで書院関係図書館文献コレクションについても言及いただきました。さらに、東亜同文書院大学記念センターのオープン・リサーチ・センタープロジェクトでのシンポジウムでは、「ミシガン大学の東亜同文書院及びアジア系文献史料のグループ化」というテーマで、グループがミシガン大学と初めて図書データの一元化を図るというその新たな取り組みをすすめる図書館

の講演をされました。さらに昨年は、書院の中国研究をめぐる東亜同文書院記念センターのシンポジウムで、『東亜同文書院との私的出会いについて』―北米に於ける極東アジア学とその資料―についてご報告いただきました。その中で東亜同文書院大学記念センターの発展への期待を強く力説されました。

以上のことから、仁木先生のアメリカでの東亜同文書院研究へのライブラリアンとしてのご活躍とその大きな功績に対し十分に本基金会の受賞に値すると判断いたしました。東亜同文書院記念基金会の理事会において仁木先生の功労賞授与が決定致しました。

仁木先生を初めて知った方も多いと思いますので、簡単に仁木先生の略歴を紹介させていただきます。1973年に上智大学文学部哲学科のご卒業で、文学士。その後神学部へ転入されました。教会で働こうという意志がおりになったと思いますが、その後、メキシコ国立自治大学で、スペイン語、それからロサンゼルスで英語の習得等されまして、77年、アメリカ、セントジョーンズ大学アジア学の修士課程に入学され、2年後にその修士を獲得。その後、同大学のライブラリアンを務めることになり、ここで初めての本格的なライブラリアンとしての経験を積まれました。83年には、ニューヨーク、ブルックリンのプラットインステイチュート工芸科学大学で図書館情報科学の修士を取得されました。同年、コロンビア大学の東アジア

図書館に勤務されまして、85年に同図書館の日本人のキュレーターとして館長に就任されました。それから92年にセントジョーンズ大学図書館のアジアコレクション部門のヘッドとして就任され、99年にはミシガン大学図書館の上級ライブラリアンに就任されました。21世紀に入り、2003年、同大学のアジア図書館のヘッドに就任されました。そして、2011年いよいよ退職ということになるわけですが、ミシガン大学より全米及び国際的な各種の組織や委員会の構築で活躍されたこと、さらに日本ライブラリーの発展などへの顕著な功績に対して特に『名誉ライブラリアン』として称号が与えられました。それをもつて、2011年に退職をされております。あらためて愛知大学との関わりに関しましては、2005年に本学図書館でアメリカの図書館及び東亜同文書院研究活動についてご講演をされたことについてはずでにふれましたが、2008年には記念センターのシカゴでの展示、我々8人ほどがシカゴへ行ったこともあります。そこで書院の展示や講演をしました。その時には仁木先生から色々御支援をいただきました。大変有難く、アメリカの情報も色々教えていただきました。2009年、東亜同文書院記念センターの我々がやっている今のプロジェクトの一つ前のオーブンリサーチセンター事業で、ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のグローバル化と

いうテーマでグローバルが中心になってデータ化していく事業のご紹介を講演としていただきました。そして昨年2014年には書院の中国研究をめぐるシンポジウムで書院との出会いと史資料というタイトルで講演をいただきました。その中では東亜同文書院記念センターに対して今後の発展を非常に心強く力説していただきました。

現在、先生は今少し目を悪くされていますが、今回の受賞に際しましては改めて勉強されて日本へ来られたということでありまして、ライブラリアンとしての確たる態度と信念が我々にも伝わってまいりました。

今回の受賞はそういうことで、我々にとっても名誉であると思っております。簡単ではございますが、推薦の辞とさせていただきます。

〔受賞挨拶〕

仁木 賢司 氏

今日こういう所にお招きいただき、大変すばらしい表彰をしていただくことになりました。感謝いたしますと同時に、自分は本当にこの名誉に値するのだろうかと思わず考えさせられました。私は皆さんがなさってきたような、東亜同文書院に対して最初から最後までを、今もって深い愛情とともにその発展をずっと見続けていらつしやるということ、そういうような感じで東亜同文書院そ

のものを考えたことが一度もなかったわけですから、心の中ではここに立っていいのかわ大変逡巡している次第です。私の仕事が、大学における学術書を収集するということを第一義におくことでしたので、アメリカで在職していた35年間は、そのみで終始したわけです。では東亜同文書院と私の関わりと言うのは何だったんだといいますと、最初の修士の小論に中国史の中の近現代史という主題を選んだのですが、私は元来上智大学文学部哲学科を卒業し、言葉はラテン語を必修としていました。そして、神学へと移りまして、やはりヘブライ語とかギリシャ語とか、ラテン語の書物を使用するという学問分野でした。即ち、特に西洋の中枢の思考の過程を辿った勉強をした人間ですので、何だか自分が日本人であることに關して非常に違和感を覚えていた訳です。何でこんなに違和感を覚えるんだろうかと思つた時に、それは自分は東洋人としての何かが欠けているんじゃないだろうか、そして日本人として自分はこのまま進んでいいのだろうか、というように考えるようになり、まず神学部を退学して自分の道を進もうとしました。それ相應に思い悩んだのですが、まだまだ心の中には西洋性愛の思考の中心であるカトリシズムの教育の中心で勉強を続けることを良しとしている自分を見ていました。そういう状況下で理解し始めたのは、自分の存在は東洋人であり日本人であり、儒教精神の影響下で育つ



た人間であるという、そのバックボーンを消すことは決してできないということです。それでひとまずそういう世界から身を引いて、外部の世界を見てみようと思ひ実行しました。言い換えれば留学をしてみることでした。

その時に、イリノイ大学、セントジョーンズ大学、スペインのサラマンカ大学、という選択肢がありました。最終的に私はセントジョーンズ大学を選びました。これはセントジョーンズ大学が奨学金を出してくれたことと同時に、自分に足りないアジア学、つまり中国を勉強させてくれるということがあったからです。

私は1年半で修士の単位を修了し、その間

集散的に台湾国民党の支援を受けて留学してきた学生達と勉強しました。セントジョーンズ大学のアジア学は彼らによつて占められておりました。あの大学は台湾国民党の推薦を受けて、大学のキャンパスの中に孫文の国父記念館そのものの形を持った建物があるんですね。そこで私は修士をやったわけですが、そういう関係から東亜同文書院の存在というものは資料をあさっている内に、日中のあるいは中日のその関係を究めていく上では、この資料にやはり目を通さないとどうしてもいけない。それでコロンビア大学に日本語関係の司書として働き始めたわけですが、年間、約3千から4千万円の私のバジェットで日本語で書かれた本を選書・購買・収集することが義務でした。日本語で書かれた日中・中日関係史を私は使命として、自分の心の中にある一つの流れとしてその書物をかなりたくさん買った覚えがあります。その後、色々と検証していく内に東亜同文書院の存在そのものが気になり始めて、もう一度自分の母校であるセントジョーンズ大学のアジアコレクションのヘッドになつて帰つてきたときに、その想いが爆発して、自分自身のバジェットは全部それにつき込みたいと思う程になりました。バジェットの総額はコロンビア大学とは比較にならない程少額でしたが、日本のものはほとんど買わないで中国のものを買っていたというのが現実だったんです。その後のミシガン大学

に移りまして11年。やはり日本のほうのキュレーターとして日本の学術書をコロンビア大学と同じように4千万円程を毎年買っていたんですね。とにかく自分は東亜同文書院のすべての資料、日本語で書かれたすべての資料、あるいは日本語と中国語で書かれたすべての資料を収集しておきたかったので、高額のバジェットの補助としての資料コンペ、ジャパンファウンデーションの特別なプロジェクト、他大学図書館との連携をしながら一大学の予算内では購入不能な高額のセツト物の購買申請を何度もやりました。その申請で獲得したタイトルには東亜同文書院関係の多くが含まれていました。このようにして極力東亜同文書院との関わりの中で日中・中日の基本的な資料をアメリカの中で少なくとも一箇所でも、豊富に資料を揃えて、学術的研究に供したいというのが私のささやかな願いでした。アメリカという土壌の中で、日本が中国のことをどのように捉え、研究してきたかということ、それに対比して中国の側から見た人たちの視点では全く違うということ。それを是正するために学者として必要なことは、非常に公正な立場でそれを歴史の中の事実として捉えていかななくてはいけないということです。例えばコミュニケーションとかインペラリズムとかという、そういうフィルターを付けないで史実として判断をする材料がどうしても必要なのです。まさにそれ故に私は東亜同文書院の資料を集めた

わけです。

リタイアした後、時々母校に電話をかけて聞いていますけども、最近の若い中国籍の留学生、あるいは研究者から、新しく日本で書かれた中国の歴史、あるいは中国の政治史、経済史とか、そういったものに対する要望が来る様になったと聞きました。それは中国では書かれていないということで、日本のほうにその要望が出されているというようなことが今の状況です。そういう意味から、私は愛知大学とはとにかく初めから密接に連絡を取り合いたいと思い、藤田先生のところには1年に一回、1年半に一度はお邪魔をしました。また、知大学の図書館では、非常に優秀なライブラリアンの成瀬さよ子さんという方に連絡をとり、書庫や資料を見せてもらい、色んな勉強をさせていただきました。

私がこのようなところに立つて東亜同文書院、東亜同文会云々というのは何だかちょっと場違いだと思っていますが、しかし本当に名譽なことで、これからの私がどのようにして生きていくのかという、一つの方向として今日この式典は大変大きな助けになると思います。本当にどうもありがとうございます。

東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰をしております。1999年度より「東亜同文書院記念基金栄誉賞」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

【2014年度受賞者】

東亜同文書院記念基金特別奨励賞

中河 和也（文学部 一年）

東亜同文書院記念基金栄誉賞

大槻 和也（現代中国学部 四年）



愛知大学 第68回 入学式



愛知大学 第68回 学位記授与式

【基金会役員名簿】

会長

佐藤 元彦

（愛知大学理事長・愛大学長）

副会長

日野西 光忠

（霞山会理事長）

理事

藤田 佳久

（愛知大学名誉教授）

星 博人

（霞山会常任理事）

三好 章

（愛知大学東亜同文書院大学記念センター長）

鈴木 修

（愛知大学常務理事）

監事

岡村 幹吉

（岡村会計事務所）

書院の皆さん、 今に思いを語る

授賞式の後、懇親会が催され、書院卒業生や関係者の方からお言葉をいただきました。

司会(中島) みなさん、こんにちわ。

今日は天気もよくて、本当に皆さんの日頃の行いがいいとみえて、外の景色も満点です。是非一つ意義ある会を、是非とも楽しんでお帰りいただきたいと思います。

これからの進行は適任かどうかわかりませんが、せんけども、書院のみなさんとか愛大の皆さんのメンバーを、お名前を知っているということで私が進行させていただきましますので、よろしく願います。

それで独断と偏見でもって、どんなふうに進めるかというところをご案内したいと思えますけども、今の基金会の状況みたいなものを、過去のスタートからですね、書院のお方から見てですね、どういうふうに期待されているかというようなことを、最初に高遠(三郎)さんからお話をいただいて、それから書院の皆さんも大分メンバーが減りましたけども、10人ぐらい今日お見えですのでこの際ですね、後輩のためにこんなことを話しておきたいというようなことがあれば、お話をいただきたいと思います。



それからあとでご案内しますが、書院の院歌とか寮歌を歌いたいと思います。それから今日お見えの飯塚(啓)さんが寮歌を作詞作曲しております。そんなこともご案内できればと。それからもう一つは、今日初めてご案内する、聞かれる方が多いかと思いますが、近衛文隆さんの「苦難に耐えて」という歌があります。これもテープがありますので、かけてですね、歌詞はあとでご案内しますけど、それも聞いていただいて、今日の会を楽しみだけじゃなく意義のある会にしたいだと思います。

それでは41期の高遠さんに、基金会のスタートのいきさつや想いを少し語っていただきたいと思います。

高遠 41期の高遠です。落第致しまして昭和18年学徒出陣で兵隊に行きました。北支から中支、そして南支から仏印へ、さらにマレー

からシヤムと、最後はペナンで終戦でした。そんな高遠でございますが、ひとつだけお話ししたいのは「東亜」同文書院です。東亜という言葉がね、はたして明治維新の頃使われていたのかどうか、明治の前は使われていたのかどうか。中国語であることは、シナでは東亜というただの。私はこれは日本人が作ったんではないかなあ。東亜というのは。中国人が東亜とは言わないね。中華だ。俺が真ん中だ。アメリカから見たら連邦は東の方にありますね。西の方にありますね。だから東じゃないんだ。ヨーロッパ、英国とかフランスとかスペインとかドイツとかポルトガル、オランダ、そういう国がアジアに侵略してきた。その頃から東亜という言葉ができたのかなと。荒尾精は東亜同文書院と名をつけたのです。という事でございますが、我々にとっての東亜同文書院の東亜、非常に聞きなれていて何も不思議じゃない。アジアの人が東亜とあまり使っていない。中国人が使っているか？日本人が使ったのかな。まさか荒尾精、根津さんが初めて言ったんじゃないだろうけども、明治になつてから東亜という言葉が出来た。大東亜戦争、今は誰も言わないね。太平洋戦争だ。パシフィック・ウオー。アメリカがつけた名前です。日本人は大東亜戦争と言ったんですね。大東亜共栄圏と言ったんだ。日本がアジアを侵略したか？フィリピン、インドネシア、マレー、ベトナム、上海、インド、全部ヨーロッパが、フランス、英国、



オランダ、スペイン、ポルトガルの植民地だった。大東亜戦争は結果的にそれを解放したという理解だった。大東亜共栄圏、我々が戦争に行つた頃は日本が目標でした。東亜とはそういう意味を含んでいたけども今は忘れられちゃっているから。東亜同文書院の東亜根津さんや荒尾精が、なぜ東亜同文書院と名前をつけたか？東亜という意味はちよつと違った意味なんだね。中華だとね。東亜というわけがないね。今東亜と言うとどうなんですかね。中国は入ってないですか？そういう東亜同文書院。愛知大学はその東亜同文書院の伝統を引き継いだ、間違いなく。学長のお話を伺ったんだけど、いろいろご苦労もあります。是非、東亜の伝統を、東亜という名前をつけた先輩の伝統を築いてもらいたい。したがって活動範囲も中国に限らず、東南ア

ジア、昔は全部植民地だったね。フィリピンもどこもね。今はT P Pと言いますか、一種の大東亜共栄圏のようなものですかね。この伝説に根ざしてですね、政府やアメリカは、愛知大学もぜひ中国に限定せず東亜全体に関連を持った学生、仕事を発表させていただきたい。私の老人としての念願でございます。

司会 ありがとうございます。今の高遠さんの愛知大学に期待する想いを伺って参りました。こういったものでお話の中にありますように、基金会のその中に真髓が含まれているというふうに理解したいと思えます。それでは昨年お亡くなりになった書院の方の大先輩の紹介、ご案内をしたいと思います。去年の基金会の終わつたその翌月の2月21日、安澤（隆雄）さんがお亡くなりになりました。享年107歳です。それから38期の加治屋（俣郎）さん、9月11日、享年94歳。10月22日、基金会の前の会長、滙友会の会長もされていた、36期の藤田照男さんがお亡くなりになりました。享年96歳でした。その他何人か計報のお知らせを受けていると思います。こういう方を思い出しながらご冥福をお祈りしたいと思えます。霞山会、滙友会、愛大のほうで一緒にいろんな行事をしているのは、墓参と寮歌祭です。墓参をスタートなされたのは、本日お見えの村上さんですね。靖亜神社をスタートにしてずっと墓参をしてきたという経緯があります。それから

同文書院の皆さんの推薦により、愛知大学が日本寮歌祭に参加したという経緯があります。そういう中で現在を迎え、霞山会と書院の皆さんと愛知大学の

交流が続いているということになるんだと思います。そこで関谷（賢三）さんが藤田さんとお付き合いが長かったことから紹介していただいて、皆さんと一緒にご冥福をお祈りしたいと思います。

関谷 滙友会の関谷でございます。去年の11月頃だったと思いますが、藤田さんが亡くなられた話を41期の高遠さんから聞きました。早速、奥さんに電話で伺いましたところ、間違いありませんということでした。そこで嘗って滙友会の事務局におりました逢坂久美子さんと一緒にお悔やみに伺いました。ご焼香後、病状のご様子を伺いましたところ、最後は元気だったそうですが、最後は食が喉を通らなくなつた、とのことでした。そのあと、ありし日を偲びながら1時間半程お話をして帰って参りました。

藤田さん滙友会最後の会長であり、また、東亜同文書院記念基金会においても、最後の会長でありました。是非々々の判断がはつきりしていたことが印象深く残っております。それと、渋谷駅近くの喫茶店で3時間程、霞山ビルが無くなるに当たって更に滙友会の運営を継続するか、否かについて事務局の意見を聞かれたこと、また滙友会解散後も、当



分の間、時々、逢坂さんと3人で食事をしたことなどが、懐かしい思い出として残っております。

改めて心からご冥福をお祈り申し上げます。

藤田照男(36期)様のご遺族から関谷賢三(44期)様へのお手紙を、ここに紹介させていただきます。

謹啓

主人の訃報に際しましては、格別のご高配をたまわりましたこと厚く御礼申し上げます。おかげさまでをもちまして、12月初め、念誓寺にて四十九日の法要を相営みました。つきましては供養のしるしに心ばかりの品をお送りいたしましたのでご笑納ください。

主人はご存じのように東亜同文書院を卒業後トーマンに入社、30代後半はアジア諸国の戦後復興のため、アジア諸国に駐在し、その後は日本経済の発展に身体をあわせてアメリカや韓国に海外駐在を繰り返し返しており、現役時代は家にいた期間はほんの稀でした。最後は日本の数少ない天然資源であるヨウド輸出に関係する仕事をしておりました。

退職後は心から愛した母校の同窓会のお手伝いを80歳半ばまで勤めてまいりました。学生時代に過ごした寮は思源寮と言います。中国の諺の飲水思源(水を飲むときは井戸を掘った人を思い出せ)からこうしたものだそうです。孫たちに、この文字を色紙に書いてプレゼントをしておりました。

80歳のときに東京の粕江から横浜の市が尾の2世帯住宅に転居しました。新しい土地でも多くの町内の方々との交流を楽しみに、とりわけゴルフ、囲碁を愛しておりました。健康そのもので一番嫌いなものは注射でした。ところが7月末、自宅で転倒し検査のため入院したことがきっかけで急激に心身ともに弱って参りました。転倒自体は単なる打撲でしたが、肺炎を繰り返し病院と施設を往復する日々となりました。8月末からはいっさい食事を口からとることなく点滴で10月末まで過ごしました。しかしながら意識はしっかりしており亡くなる当日もひ孫の写真をみてはかわいいね、インドネ

シア大統領が変わったね、プロ野球の日本シリーズなど現状を前向きに捉えながら一方で弱る体力の置き場所を考えているようでした。まさに人生をつなぎとめる鎖をひとつずつ外していく作業をしていると感じました。そしてすべての鎖を外し終わった10月22日早朝、一人で旅立っていきました。長いようで短い旅立ちの間でした。

横浜の、市が尾近隣に墓を用意し、来春先祖とともに埋葬の予定です。生前、皆様から頂戴したご厚誼にあためて御礼申し上げます。

2014年12月

藤田節子
家族一同



司会 ありがとうございます。今のお三方についてはですね、墓参の時や寮歌祭で、元気な姿を見せていただいたのを思い出しております。安澤さんは、後半は耳が遠くなったりしていましたが、お体の方は元気でした。

傍で私が通訳をした事を覚えておりますけども、そんなふうにいるんな姿が思い浮かびます。それでは42期の小崎(昌業)さん一言、よろしかったら。

小崎 42期の小崎です。愛知大学では第1期生。書院と愛大の両方を卒業しているのは今や私だけです。今何か話をしろということですが、私が今思い出すのは中国大陸の昔のことですね。私が東亜同文書院に入ったのが昭和16年でして、18年の末には学徒出陣で兵隊に動員されたのですが、その間書院で味わったこと、勉強したこと、あんなにいい学校はどこにもないんじゃないかと。今思い出します。中国大陸はもとより、日本においてもあの当時、あれだけ自由奔放な生活ができた学生の自治に任された学校はなかったんじゃないか。本当に我々はそれを思うと、同文書院というものがなくなつたことに涙を禁じえないものがあります。

我々が入学した昭和16年に、2期生に林出賢次郎先輩が外務省を辞めて、書院の学生監に就任されました。林出さんは、在学中に日露戦争があり、日英同盟に基づいて英国から中国の西北地区のロシアの進出状況を調査するよう依頼がありました。そこで約2年かけて単身ウルムチからトルファンを調査しました。同時期に他の2期生4名も各自調査旅行をしております。

この林出さんほか2名に我々は東京から

上海に引率されたのですが、東京では軍人会館(現在の九段会館)に我々は5日間ばかり宿泊しました。その間、毎日あちこち見学したのですが、最後に出る時に、夕方でしたね、裏庭に全員整列して、これから京都、大阪、長崎へ行こうとしていたら、上の窓が全部開いてですね、女の子がバーっと投げってくれる物があったんです。何だろうと思ったたらカーネーションなんです。鮮やかな明るい色のカ



ーネーションをみんなが投げつけてくれている。ぼくら感激しましたね。その頃は女性と男性とが自由に話できなかったのです。そういうことでありがたいと思つて、それを受け取つたあと列車でもつて、伊勢、京都、大阪へ、そして長崎から船で上海に向かったのですが、その間、林出賢次郎さんとあと2人、同文書院の職員がついておられて何を教えら

れたと思いますか？寮歌です。そこに今日配布された手帳みたいのがあります。その寮歌、院歌を徹底的に教えられた。だから僕らが上海に着いたときに、上海の埠頭でずうつと海から近づく時に、埠頭で待っていたのは上級生の代表です。その方々が寮歌、院歌を歌い我々を迎えていただきましたが、我々もそれに応えたのです。

それから船を降り、バスに乗り租界の中を走りまして同文書院に着いた。同文書院の入口は赤い門で、中に入ったら緑の芝生が燃えるように青かった。それを見て我々感激したのですが、上級生が整列して待っていてくれた。その上級生が、僕らが同文書院といったらおそらく、日本における高等学校の学生がやっているような、高下駄はいて腰に手ぬぐいぶらさげて、そんな格好を想像していたのですが、同文書院の上級生はみんな、外国人が見てもみすばらしくない立派な服装をしていました。それはなぜかというと、根津先生が「上海というのはお前たちが思っているような街ではないんだ。これは世界の上の上海であつて、ここに来たら日本のような恰好をしていたら馬鹿にされる。お前たちそれをよく考えてしっかりとした服装をして外を歩け」というふうに言われた。それでみんなそのような恰好をしていたんだらうと思います。それが、本当に素晴らしい所でした。

それから2年たつて、私は林出賢次郎さんをお願いして、「大旅行」というのがありま

したね、それに便乗したいと思ったけれど、戦争がだんだん深化してこれでは到底行けないと思った。だから早く行かせてくださいということをお願いして、そしたら林出先生が「じゃあ行け。無理のないように行けよ」と、お守りを下さったんです。何のお守りか、

小さなお守りですがそれをいただいて、そして上海から青島へ行っただんです。まず第一歩が昭和17年6月14日です。そうしたら、その青島へ行く船の中に上級生がいたんですよ。それがどういう上級生かといいますが、やはり大旅行に行く人達でした。それで上海から青島へ着いて私が降りて、そこで何ていうか名前を忘れましたけど、なんとか会館という、そこへ泊ったんですが、そこに上級生も泊っておりまして。その後私は石家荘からずっと奥地へ入りました。非常に暑い頃で、列車の中に入ったらみんな素っ裸なんです。よ、兵隊さんが乗っていまして外を見ると、馬がグルグル井戸の周りを回ってる。何をしているかという井戸の水をくみ上げています。そんな所を見ながら山西省の太原ですね、そこへ行きましてそれから南部の臨汾、汾陽、離石等へずうつと行って、それから北へ上がって蒙古の包頭へ入り、それから北京に出てきて、ちよつとだけ日本へ戻って上海へ帰った。そういうことがありました。

懐かしいものですからついでに駄弁も申しましたけども、あの頃の同文書院の素晴らしさというのは本当に筆舌に尽くし難いものが

ありましたね。本当に良い学校だと思います。ああいう学校を今後復活できたらいいんだがなあと思うんだけど、そういうチャンスがあるかないか、どうでしょうか？皆さんひとつ教えていただきたいと思います。ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。何年か前にですね、藤田（佳久）先生が書院生の方々にいろんなアンケートを出しました。その結果ですね、いろんな細かいデータが出ておりますけども、学校に対する満足度、自分の将来に対してですね、いかに同文書院の学生時代の影響が高いかというふうなことをですね、皆さんおっしゃっていました。そういう面では今の小崎さんのお話も、同文書院、愛知大学、それから外務省、霞山会とさらに愛大の記念センターで活躍していただけているということはですね、それは愛知大学でもそれに負けないような学校を作ってほしいという、そういう思いが伝わったと思います。

愛知大学もグローバル化をしまして、国際コミュニケーション学部だとか現代中国学部だとか、そういう学部が大いに活躍しておりますので、ますます愛大に期待していただきたいと思えます。それでは、愛知大学からお見えのスタッフの紹介をしていただきたいと思います。三好（章）先生、お願いします。

三好 愛知大学東亜同文書院大学記念センター長の三好と申します。ありがとうございます。本日参りました愛大関係者をご紹介いたします。最初に、藤田佳久名誉教授でございます。それから次に校友課、同窓会関係を取りまとめております会田（正彦）課長です。そして記念センターの統括部局になりますのが、愛知大学豊橋研究支援課の田辺（勝巳）課長です。さらに研究員の武井（義和）君です。また、一番若い事務局担当者の森（健一）君です。こういう方々に支えられて、東亜同文書院大学記念センターは動いております。現在までに、東亜同文書院大学記念センターはセンター長が4代目になります。1番目は今泉（潤太郎）先生、2番目に藤田先生、3番目に馬場（毅）先生で、私が4人目ということになります。

先ほどもお話に上がりましたが、現在、本センターの研究プロジェクトは、文科省から私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の指定をいただいております。プロジェクトの推進に当たり、皆様方の多方面からのご協力をいただき、本当にありがとうございます。改めて、御礼申し上げます。この研究プロジェクトは、要するに東亜同文書院のあり方と現在、在の日本・中国をどう結び付けていくのか、ということがテーマになります。昨2014年12月には本日お見えの仁木（賢司）先生をはじめといたしまして、アトラントのジョージア州立大学のダグラス・レイノルズ先生、



それから、明治大学の石井（知章）先生などのご参加を得て、シンポジウムを開催いたしました。東亜同文書院の中国研究とは一体何であったのかテーマでした。私も報告を致しました。

書院の研究を一言で表現すれば、何になるでしょうか？百年前の、1世紀前の中国研究が果たして意味があるのかという人が必ずあります。そういう方々には、私は意味があるのだ、と答えることにしております。その意味は何かといいますと、中国は「不易流行」の世界である、ということです。「不易」の部分と「流行」の部分がある。「流行」というのは、時代が変化すればいろいろと変わるわけですが、根底の部分にある「不易」の部分には、書院開設当時から多くの方が関心を寄せられました。書院の初期の先生方の中

に、特に今私自身が最も関心を傾けている根岸侑（ただし）先生がいらつしやいます。根岸先生が書院の学術、言い換えれば書院の研究と教育の方向性を大きく創られたといっても過言ではありません。その根岸先生が研究されたのは、詰まるところ中国社会の構造でした。そして、社会構造の根本を研究するということは、百年前の日本人が中国で直面した異文化としての商習慣や多様な形での買弁、あるいはギルドを明らかにするためでした。それらに正面から向き合い、きちんと理解しないと中国では商売ができないということになります。これは、現在にも通じることだと思えます。同文書院の位置づけというのもまさにそういうところから出てくるわけです。商売と俗な言い方をしましたけども、経済関係を取り結ぶ時にきちんと相手のことを理解しないといけない、理解するときこそそういったバックグラウンドへの配慮が必要不可欠なのではないかと思えます。また、根岸先生がプランニングされた書院生の卒業大旅行とその成果についても同様です。やはり書院設立当初の時期について、もう一度きちんと整理しておくことが必要ではないかと思えます。そうした意味で、資料の復刻を進め始めております。初期の書院の先生方の業績、例えば馬場敏太郎先生等、現在では必ずしも十分に評価されていない先人の業績を、21世紀の現在、きちんと示すことが重要であると思えます。そして、書院が百年前

に行った研究から、百年前だから古いのではなく、百年前だからこそ新しいものを見出すことが出来るのではないのでしょうか。現在の中国が「改革開放」というような看板を掲げ、人民公社を解体したらば、出てきたのは昔の村でしたということは、多くの方がご承知かと思えます。従って、中国では人と人のつながりは、実はあまり変わっていないのかもしれないですね。それゆえに、百年前の書院の中国研究が意味を持つのではないかと思えます。書院の研究、およびこれまで積み重ねてきた様々な人脈をこれから先どのようなように生かしていくのかということを中心に、東亜同文書院記念センターの研究活動、広報活動が続けていきたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

司会 ありがとうございます。愛知大学です。ね、中国研究それから同文書院の研究に對して、ひとつ大いに皆さん期待してください。それではちょっと趣向を変えて、皆さんは聞いたことがないかと思うんですけども、近衛文隆（文麿公の長男）さんの作った歌があります。これを最初にご案内してみたいと思います。ちょっと聞いてみてください。

「♪」「苦難に耐えて」 作詞 越知登喜男
作曲 近衛文隆

司会 いかがでしたか？あの抑留された状況とですね、最後に奥さんから送られたスルメ

を噛んで奥さんを想う、そういう歌詞が込められております。書院の皆さんにもですね、抑留された方が何人かいますね。40期の坂下（雅章）さんとか、40期の宇佐美（和彦）さんから抑留されていた経験聞いたことがありますけども、文隆さんの場合は非常に劇的というか悲劇というか。鳩山（一郎）さんが（ソ連に）行つてですね、すぐ帰れるというところで日本にいる友達に、「ゴルフをするからゴルフ場のエントリーをしておいてくれ」と頼んでいながら帰れなかったと、そんな思いが込められているかと思ひますので、これを機会に、この歌をご紹介させていただきます。

それではですね、この際お話をしてみたいという事があれば伺いたいと思ひますがよろしいですか？先ほどご案内したように、先覚の墓参については、祭主の村上（武）さんに変お世話になつて、盛大に毎年春と秋の霊祭を見せていただいた記憶があります。そういうことでそんな思いを兼ねて、少しふれていただきたいと思います。

村上 18期の準会員の村上でございます。18期といいますと、ちょうど私の父が東亜同文書院が上海にできた年に生まれたということとでございます。非常に何か縁があつて、父は佐賀県の県費生で上海に行つたわけでございますが、いろいろ話を聞いてみますと、東亜同文書院について、さきほど小崎先生か

らお話がございましたけども、これほどいい学校はなかったということです。私は父の話聞いていますと、あまりにも甘え過ぎていたんじゃないかという感じがさえたくらいです。就職してそこが思ひしくなくて、もう一回同文書院に帰りたいということで手紙を出して、それでなかなか返事が来ないで、明日赴任するという電報を打つたら赴任旅費が送られて来たそうです。それを受け取つてから中華学生部の助教授ということで同文書院に戻してもらつた。その後3年間ぐらい務めたんでしようけれども、何か赴任した時に京都大学で国内留学と言ひますが、勉強させてもらうという条件があつたそうです。無理に頼んで同文書院に入れてもらつていながら、そういう条件がついたなんていうのも、私なんかの気持ちからするとちよつと分からないところがあるんですが、そんな折に、何かで上海へ来ていた大川周明先生に「東京は革命の最中にあるのに、お前は上海くんだりでウダウダしていたらイカン、東京へ出て来い」と言われて、それに納得したわけではないけれども東京へ出てきて、社会教育研究所とか猶存社とかいう所に関係しました。父は安岡（正篤）さんとか満川亀太郎さんとか大川周明さんらと一緒に仕事をやつたわけですが、ただ父が後から書いているのは「自分は太田周明の生徒ではなくて根津山洲（一の号）の弟子であつた」と。というようなことで、行地社の機関紙の『日本』と



いう雑誌がありました。創刊から3号まではうちの父が編集兼発行をしております。その後は佐賀の方で二・二六事件で刑死した西田税さん、うちの父の後輩の方ですが、その人に譲つて3号で終えております。

そんないろいろな経緯がございまして父は東光書院と云う私塾をやつていましたが、東光書院は戦争最後の年に空襲で焼かれました。埼玉県東松山市に再建し、昭和30年からは、昭和10年上海の同文書院に造られた靖亜神社を私ども東光書院で祀ることになりました。お引き受けしてずっと祭主を続けてきたわけですが、父が亡くなりまして私が祭主を継いだ時、縁があつて同じ東松山市に住んでおられた愛大卒業生の小高

(圭治)さんという方が、「同文書院の關係でこういうところがあるんだ」というようなことでうちへ訪ねて来られました。それから小高さん。小高さんは一家を挙げて祭典の準備などにご奉仕くださいました。それにあの時は愛知大学の関東同窓会の井柳(学)さんとか、今日お見えになっております高井(和伸)先生とか、横浜の横田さん、千葉の青山さんとか、多くの方々に非常に協力していただきまして、大勢祭典に参列していただくことになりました。そういった中で霞山会からは近衛通隆先生に毎回参列していただきました。根津先生のご家族の御位牌と、生前、根津先生がずっと線香を絶やさなかったという荒尾先生と十烈士の御位牌が京都から祀られているということで、靖亜神社の再建と同時に、私の所で建てました大寛堂^{なからい}という拝堂があったんですけれども、そこで直会^{なからい}をやりました、近衛(通隆)先生は新潟の名酒八海山が好きだということで、いつも持ってきてくださいました。それを一升瓶から茶碗で皆さんと酌み交わしたことがございました。そういった中で、これは何年だった記憶にございせんが、愛知大学から大野一石先生がおみえになり、その時に山田順造さんも来ておられていろいろ話をしておって、大野先生が、「本間(喜二)先生から一升瓶を山田純三郎(順造氏父)先生の所へ届けてくれと頼まれたことがあった」と言われました。そうしたら山田順造さんがそれを受けて、「そ

れは靖亜神社の御神体を父が持ってきた。どうかしたらそういう關係があつて、本間先生が山田純三郎先生にお札の意味を込めて持つて来たんじゃないか」というような話が、山田さんと大野先生との間でありました。で、それまでの山田さんという方はどういう方だったかと言いますと、三菱商事(社員)でしたか、とにかく「愛知大学はアカだから、あんな学校は嫌いだ」ということを公言してはばからないような方だったわけです。それで自分の所で山田純三郎先生のいろんな資料を集めて、それを基にして一つの学生寮を作つて、そこで自分がその主人になつて、学生たちにその資料を見せながら教育をしたいんだというような夢を持つておられました。それで滬友会の方にも今日お見えの方で、山田さんからのいろいろな手紙や文書を受け取った方がおられるだろうと思ひますけれども、いろんな企画を送つたり協力をお願いしたりしても、なかなか皆さんの協力が得られないと。

それで東光書院の、東松山市にありましたその土地が2000坪くらいあつたんですが、そこへ寮を建てさせてくれというようなことを言つてこられて、ではその資金はあるんですかと言つたら、自分の今住んでる所の家を売れば、そのくらいの金はできるだろうというようなことを言う。ところが病身の奥さんがある、それから皆さんご存じの、山田純三郎の長女で順造さんの上のほうの姉さ

んですけれども、革命の犠牲になつて身体が不自由になつておられる方がおられる。そういった人たちを一体どうするんですか？と言つても、いや、何とかなるみたいなことを言うんですね。私のとこに來られて。しかし、そう云われても私の所、東光書院にそういったものを建てて貰えるわけがない。それでいろいろあちこち埼玉県でお金を出してもらえないかということ、教育委員長をやつておられた関根(茂章)先生という、うちの近所におられたんですがその方の所へ私が案内して、何とか埼玉県で面倒見てもらえないかという様なことを言いに行つたり、いろんなことを二人でやつた記憶がございます。

ですから、今日(奥様が)おられます阿部弘さんなんか山田順造さんと同期で、一生懸命山田さんをサポートしておられたわけですが、そういった中で、靖亜神社の祭典の時に大野一石先生との出会いがあつたがゆえに、その時に山田さんの愛知大学に対する考えが変わつて愛大へ持つて行つたらいいんじゃないかという様な話がその時から出始めたんですね。それで了解が得られて、そのあと山田さんが亡くなつて、阿部さんがじゃあどうするかということで、いろいろ後始末などをやつておられました。その時にも阿部さんの方から私に、どうしたらいいだろうかという話があつて、私は可能性としてはこれはもう愛知大学にお願いする以外ないんじゃないかということをお部に申し

上げました。阿部さんと愛知大学との間でどういう話があったか、私は聞いておりませんが、幸いなことに愛知大学の方ですべての資料を引き受けてくださるということで、それを運んでいきました。それからまた私どもの靖重神社の方でも、京都の山洲庵からいろいろな資料なり遺品なりをお預かりしていただきましたのを全部、愛知大学の方へお願いするということで運ばせていただきました。京都の山洲庵にありました小さな厨子と御位牌につきましては、これは根津先生と奥様と、それから養子に入られて亡くなった息子さん（真さん）がおられたわけですけども、その方々の御位牌は川崎の根津芳造さんの息子さんで歯医者をやっていた根津進さんのところへお願いして根津家の山梨の本家の方へお引き取りいただきました。それから荒尾精先生のお位牌と十烈士の御位牌は、荒尾先生のお墓のある全生庵に引き取っていただきました。そういったことがありまして、現在では御位牌は全生庵にあります。皆さんには、ご記憶願って、今後何かの時にはそういうことを思い出していただければと思います。

愛知大学の皆さん、特に愛知大学の同窓会の担当者の方々に非常にお世話になりましたし、今日（奥様が）来られておられます滙友の阿部さんには本当にお世話になりました。私どもで靖重神社を40年間祀ってきたわけですけども、滙友会が解散するというこ

とで、うちの親父が生きていればどういう考えがあったかわかりませんが、息子である私がそれをお預かりして先行きどうなるのかと、私の息子に靖重神社をお祀りしろと言っても、全然認識も意識もしてない者がやってもうまくいくわけがないですし、ですからこの際は、滙友会として引き取っていただける会の実体のある間にということでお願ひいたしました。平成8年に春名（和雄）会長それから賀来事務局長が非常によくご理解して下さいお引き取りいただいた次第です。40年間私ども親子で靖重神社を祀ってきたということに対して、感謝状の形でもって感謝の意を表していただきました。靖重神社をその時点で滙友会の方にお返ししたわけです。ですからご神体は滙友会のほうから多分愛知大学のほうにお預かりしていただいていると思います。私は先日藤田先生からのご依頼がありましたので、靖重神社についてちよつと書かせていただきました。靖重神社にある精神、同文書院の精神というのは、これはずーっと愛知大学へもその精神を引き継いでいただくことが大切じゃないかと書かせていただいた物がございます。何かの機会にお目に留まればお読みいただきたいと思ひます。そんなことで、山田順造さんについていろいろな思ひ出ございますが、お話しさせていただきました。また何かの機会があればお話しさせていただきますと思います。どうもありがとうございます。

司会 ありがとうございます。同文書院の歴史について学ぶというようなことで、先祖をとく、先覚の墓参をすることは大事だと思ひます。現在は、2月に京都伏見の月橋院において根津先生の梅花忌を、4月には鶴見の総持寺において根津先生の桜花忌を行っております。それから5月にはですね、本間先生の欽慕の会を小平霊園において行っております。それから9月には、山田岳陽先生の墓参をしておりますが、今一時中断をしております。それから10月にはですね、谷中の全生庵において荒尾先生の墓参をしております。先祖から歴史を学ぶという点をですね、今も続けております。その際ご案内をしておりますので、是非ひとつおいでになれる方は参加していただきたいというふうに思ひます。

それでは時間がだいぶ過ぎてきましたので、みんなで寮歌を歌いたいと思ひます。ここにですね、同文書院関係のいろいろな資料を岡山で集めてくれている有森（茂生）さんがいまして、是非皆さんに古い記念のレコードを紹介してもらおうと思ひます。たくさん持ってきていただいておりますけれども、全員の方に一番関係の深い院歌をご案内してもらって、あとは資料紹介をお願いしたいと思ひます。

有森 昭和14年に東亜同文書院が同文書院40周年記念ということで非売品としてSP

版を作ったのです。私はこのレコードを含め、これまで計3枚発見しまして、愛知大学の同窓会の支部で実際にこれにかけて、現在の同窓生に歴史の流れをはっきりわかつてもらうように宣伝しております。この前兵庫支部総会でもかけてまして、書院の方3名に参加いただけました。まずは院歌。明治40年、大村欣一作詞ということで、聞いていただきたいと思います。こちらはまだ配布しておりませんが、これも昭和14年に東亜同文書院が40周年記念ということで寮歌集を発行しました。先日これを一部手に入れ、計100部自費で作りました。本日参加された方でまだお手に取られてない方は是非お持ち帰りください。さらに数部ほしいという方がおられましたら、記念センターの森様に相談してみてください。では、院歌を流してみたいと思います。

「♪」 院歌

有森 はい、ありがとうございます。このあと2月18日の京都伏見桃山での梅花忌にこのレコードを持って行って、根津一先生の顕彰の際に流せたらと思っています。

司会 ありがとうございます。それでは、後半に近づきましたけども、改めて寮歌を、皆さん座ったままで結構ですから、みんなで元氣よく歌いたいと思います。それでは最初に



に書院の方からですね、音頭をとっていただきたいと思います。

小崎さんお願いします。それでは「長江の水」を。

「♪」 長江の水天をうち

有森 それでは次、「風吹け吹け」を歌います。

「♪」 風吹け吹け 活靱風し

司会 それでは少し雰囲気を変えてですね、本日お見えの飯塚さんが作られました、「ああ寮歌」があります。歌詞は配布しました寮歌集に載っております。楽譜は届けてあるかどうか分かりませんが、後ほどお配りします。「ああ寮歌」をテープをかけて皆さん一緒に歌ってみてください。

「♪」 月は皎皎丘に照り

司会 音を聞いてみてですね、少し機械の調子が悪くてすみませんでした。本物はもっと素晴らしい歌です。それでは、引き続き書院の方からですね、次の寮歌を関谷さんお願いします。

関谷 それでは、我々が寮におった時に悲しい時やさみしい時や苦しい時、まあいろいろな時に歌った歌を歌います。桃李の吹雪、1番3番5番と歌います。

「♪」 桃李の吹雪乱れ散る

司会 ありがとうございます。今日は書院生の奥さん方が三人お見えです。阿部（弘夫人・光）さんと田沼（菊弥夫人・敏子）さんと片淵（中村輝美夫人・妙子）さん。ご感想をと言ったけども、みんな遠慮されました。皆さんテレビで見たことがあるかとは思いますが、阿部さんは、大きな地震があっても我が家だけは安心ですとテレビでシェルトーが出ました。阿部さんの家だけは大い地震が来ても安全です、という事で、これがテレビに出ました。

阿部 我が家が安全だということではございませんが、我が家の一部屋を子供たち4人が全部独立しまして、一つ余っている部屋にシ



エルターを作りまして、そこに私が入れば私だけが安全、我が家が安全ということではございません。私だけは生き残るということでございます。主人が生き残っている頃、もう2年前に亡くなりましたけれど、あの這いずってもしらっしゃいねと言ったら、もう俺はいいと言っていましたので、じゃあ私だけ助かりますって言うっていただけです。今日日本になんか中島さんのお誘いのおかげで、図々しくもまた参列させていただき、主人がご厚意をいただいた諸先輩方にお会いできるということがとっても今、私にとっては生きる力になっております。今日もいろいろな方からお話いただいたことが、とても私の気持ちを豊かにしてくれました。これは主人が残してくれた大切な遺産が叶って、今思いながらこの会に参列させていただきました。本当にありがとうございました。



田沼 40期の田沼でございます。今日は、寮歌とかいろいろと歌いましたけれども、主人と二人でよくお風呂に入って一杯飲んだりすると必ず歌っていたんですよ。それが思い出すと涙が出ました。ありがとうございました。

片淵(中村) はじめまして。私は40期の中村輝美と、戦争中に一緒になったものですけども、昭和20年の5月30日に、南西諸島の上空で偵察中に戦死しました。当時私も上海に住んでおり、書院の学生さんがよく出入りしてまして、その中の一人が中村輝美でした。13期予備学生として三重の航空隊に配置されていた時に、ちょうど母と一時帰国した時に会いに行つて、それからちょうど一年目に



戦死したのです。私は上海にまた戻る途中で神戸から船に乗ったら、19年の9月に関門海峡で船から降りて中村の所に行つて簡単なチェックをしてあげましたけれども、一度も世帯を持つこともなく時々会う程度で戦死しました。もしここに中村が居たらきっと喜んでるかと思えます。その後も縁あつて再婚しまして、今片淵と申しますけども、片淵ももう亡くなりまして今、同文書院を自分が見たり聞いたりすると本当に77年前を思い出します。今日は田沼さんに誘われて参りましたけども今90歳になりました。まだこれからも戦死した人の分を長生きして、また、このような会に出られればいいなと思っております。今日はありがとうございました。

司会 今のお話のようにですね、特攻でお亡くなりになったわけですね。靖国神社にずつと祀られております。

殿岡晟子 中島（寛司）さん、三人とおつし
やったけど、私も同文書院の夫を二人もつて
おりました。

司会 あっ！先生、失礼しました。

殿岡 亡くなりましたけど。

司会 すみませんねえ

殿岡 いえいえ。

司会 一言おつしやってください。

殿岡 今ね、おつしやっていましたけども、
13期、私の一番上の兄が同じ学年なんですよ。
同文書院に入れない頭の悪いやつだったら
しく早稲田から行ったのですけども、13期の
予備学生で、三重の航空隊に集まったのです。
その時に、お風呂の中で同文書院の院歌を歌
っているグループがあったの。自分がそっち
側に挨拶したいんだけどなんとなくあれで、
どこの校歌ですかって知っているのに聞い
たら同文書院だった。院長はだれですか？と
さらに聞いたら本間だと言う。で、本間は良
い院長だって盛んに言われたんです。それで、
実は長男（忠彦）ですって答えたらしいんで
すよ。で皆様が出征する時父（本間喜一）は、
命を大切に帰って来いと。無駄に命を捨てる
んじゃないって言って学生さんを出したん
です。ただ私の兄には祖先の加護を祈ると言
って出しました。やっぱり侍だったなと思っ
ております。



司会 ありがとうございます。さきほどの
田沼さんですが、ご主人は優秀であったと聞
いておりましたので、ぜひ成績を見てみたい
と、100周年の時に豊橋に行つた際に学籍
簿を閲覧されたそうです。そうしたら、素晴
らしい成績であったと。いうことで二度惚
れ直した、という話を聞いております。

最後に愛知大学の逍遙歌をですね、応援メ
ンバーが来ておりますので前の方に来ても
らって、同文書院に負けないように、元気に
寮歌を歌っていただきたいと思います。

小川 愛知大学の逍遙歌、この歌はですね、
亀田敏生、この方の作詞、山田昌弘の作曲で
す。亀田敏生さんは同文書院46期の方で毎日
新聞に勤められた方です。山田昌弘さんって
いうのはですね、豊橋の銀行におられた方で、



舟木一夫の先生であります。1番2番6番歌
います。当時の愛知大学、昭和21年11月15日
に創立。国内外からの学生は翌年の22年1月
に豊橋市に参りました。それでは歌の音頭は
小川（悟）であります。
小川 それでは1番2番6番、3コーラスま
いります。
「♪♪」♪月影碎くる東海に♪



司会 今日 は 長 時 間 有 り が と う ご ざ い ま し た 。
 今日 の ス テ ー ジ は 全 員 が 主 役 で し た 。 本 当 に
 思 い 出 に 残 る 会 に な っ た か ど う か 分 か り ま
 せ ん が 、 皆 さ ん そ れ ぞ れ 意 義 を 感 じ て い た だ
 い て お 帰 り い た だ け れ ば と 思 い ま す 。
 そ れ で は こ れ で お 開 き に し た い と 思 い ま
 す 。 あ り が と う ご ざ い ま し た 。



表紙写真ご芳名

小林	村上	会田	釜井	中川	堀田	阿部	中川	村尾	夏目	森	武井	有森
岩間	奥村	平井	岡村	片淵	殿岡	関口	飯塚	杉浦	小川	倉持	中島	高井
関谷	阿部	高遠	小崎	星	仁木	北川	佐藤	藤田	三好	高階		



本間先生欽慕の会

平成26年5月10日(日) 東京小平霊園

【参列者】(敬称略)

- ◇本 間 家 本間万里子、殿岡晟子、高橋光子
- ◇愛知大学 砂山幸雄(副学長)、藤田佳久(名誉教授)、会田正彦(校友課長)、夏目益良(東京霞ヶ関オフィス所長)
- ◇滬 友 会 小崎昌業(42期)、中子良吉(44期予)、幅館卓哉(44期専)、飯塚啓(46期予)、山内喜充(46期予)、関口忠彦(46期予)、
- ◇愛大同窓会 杉浦福夫、小川千尋、小川悟、山本壘、高井和伸、山田晃司、中川善弘、由比淳子、村尾竹一、戸田七支、金森定夫、春井勲、中山弘、南昌彦、岩間毅、伊藤寛一、中島寛司



根津山洲先生墓参 桜花忌

平成26年4月2日(水) 横浜の鶴見総持寺

総持寺境内の桜は満開、好天のもと、正午に墓前に集い、お花、お線香、お水を供え敬礼。隣の書院1期の水野梅曉氏の墓前も同様に供え拝礼。一同「般若心経」を唱え、院歌、長江の水、愛大逍遙歌、桃李の吹雪、嵐吹け吹け、などを献上し、故人を偲び書院の歴史に想いを馳せました。

直会は、JR鶴見駅西口の蓬莱春飯店でした。小崎さんの音頭で、献杯・乾杯。生ビールに紹興酒、中華料理の美味に、至福の時の始まりでした。根津精神に触れ、書院の顕彰、愛知大学の書院継承の意義、あり方などにも話題が及びました。藤田名誉教授のご参加もあり、有益なものでした。

参列者：(左から)村上武(18期準)、小崎昌業(42期)、幅館卓哉(44期専)、藤田佳久(愛知大学名誉教授)、中子良吉(44期予)、小川悟、中島寛司、の7名(敬称略)

荒尾東方斎先生墓参

平成26年10月22日(木) 東京谷中の全生庵



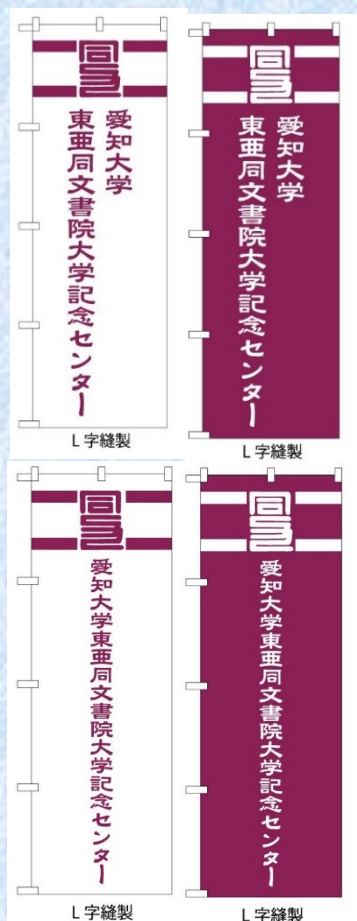
全生庵の荒尾東方斎先生の墓前に、正午に参集、献花にお線香を供え敬礼。一同、「般若心経」を唱え、院歌、長江の水など斉唱、青春の想い上海に通じ。

記念写真は、いつも本堂の階段で撮りましたが、この日は生憎小雨模様にて庫裏内になりました。直会は、伝統ある全生庵の庫裏で行いました。ビールで献杯、お寿司など食しながらの歓談。荒尾先生の功績や中国への想いなどに触れ、書院の学績や記念センターの活動報告に関心及び、現下の日中関係にも話題が広がりました。

参列者：(後ろ左から)藤田佳久(愛知大学名誉教授)、村上武(18期準)、中子良吉(44期予)、中島寛司、(前左から)幅館卓哉(44期専)、小崎昌業(42期)、熊谷範一郎(42期)、関谷賢三(44期予)、の8名(敬称略)

愛知大学東亜同文書院大学

記念センターののぼり旗ができました



のぼり旗は右の4デザインございます。

【サイズ】横600mm×縦1800mm

【素材】テトロンボンジ

◆入手方法ならびに価格◆

幟旗は1枚1500円+税です(指定銀行口座への先払いとなります)。
枚数が多い場合は別途お見積もりいたします。

送料は1枚3枚は400円+税ですが、4枚以上のご購入の際は価格は変わります。

◆問い合わせ先◆

株式会社ブレイン

〒604-8241 京都市中京区金座町22 ストックビル三条烏丸2F

TEL 075-21317500 FAX 075-21317509

E-mail: info@brain-creative.jp

担当: 松村 修(愛知大学卒業生) 直通TEL 090-5662-5551

東亜同文書院大学記念センター活動レポート

① 岐阜展示会・講演会を開催

5月17日、岐阜市のじゅうろくプラザ（岐阜市文化産業交流センター）にて、愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催／文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の展示会・講演会「愛知大学と東亜同文書院大学」を開催しました。講演会・展示会は毎年開催している事業で、横浜、東京、弘前、福岡、シカゴ、神戸、京都、米沢、名古屋、富山、沖縄、長崎での実績があり、東海地方で開催するのは実に4年振りとなりました。今回、本学OBのつボイノリオさんの番組『つボイノリオの聞けば聞くほど』で連続企画として東亜同文書院大学をご紹介いただいた関係から、CBCラジオに後援をいただき、あわせて一般財団法人霞山会、公益財団法人愛知大学教育研究支援財団の後援により開催のはこびとなりました。講演会は3講演行ない、本学OBばかりピーターの方々も参加され、総勢120名の聴講者がありました。講演内容は開催地が岐阜ということもあり、本学の持つ文化財や歴史的史資料の紹介をし、史資料を展示している大学記念館へ足を運んでいただけるような内容としました。

◆講演1、「愛知大学ヒストリーと文化財」

武井義和氏（東亜同文書院大学記念センター・研究員・本学非常勤講師）

◆講演2、「愛知大学から見る東亜同文書院」

三好章氏（東亜同文書院大学記念センター長・本学現代中国学部教授）

◆講演3、「東亜同文書院大学記念センターコレクション——書院生による中国大調査旅行と孫文を中心に——」

藤田佳久氏（東亜同文書院大学記念センターフェロー・本学名誉教授）

展示会場では、東亜同文書院大学と愛知大学の歴史紹介のほか『大学史からみる愛知大学と学部紹介』と題して、本学の各学部誕生とその経緯・教育・人材育成などの特徴を中心に紹介しました。高校生の来場もあり、百名以上の方に参加いただきました。



② 広島展示会・講演会を開催

10月21日から26日の6日間、広島県立美術館にて愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催／文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の展示会・講演会「東亜同文書院大学から愛知大学へ」を開催しました。

今回の展示会・講演会は中国地方で初めての開催となりました。広島県は東亜同文書院への入学者数が日本で3番目に多かったことから、その背景ならびに広島出身の書院教員などを展示した特設コーナーを設け、市民の方々に東亜同文書院と本学が身近な存在であることをご紹介しました。来場者数は280名にのびりました。

講演会では、今年で92歳を迎えた宮田一郎氏をはじめ、3講演行いました。

◆講演1. 「大衆の中で大衆に学ぶ―母校・東亜同文書院を回顧する」

宮田一郎氏（東亜同文書院大学第41期生、元NHK中国語講座講師）

◆講演2. 「東亜同文書院の中国研究―根岸佑を例に」

三好章氏（東亜同文書院大学記念センター長・本学現代中国学部教授）

◆講演3. 「東亜同文書院関係の史資料収集とコレクション紹介」

有森茂生氏（愛知大学法経学部卒）

藤田佳久氏（東亜同文書院大学記念センターフェロー・本学名誉教授）

開催後回収したアンケートでは、多くの感想をいただきました。

「私の祖父（書院20期生）の中国語ノートと再会できたことは、本当に感慨深いものがありました」

「これからも日中友好のため、広く国際交流発展の力になる人材が育ってゆくことを望みます」

「このような歴史があったとは知りませんでした。もっと多くの方に知っていただきたいと思います」

「このように展示されてみると、関係のなかった方も関心を抱ききっかけになると思います」

今回の広島展示会・講演会は、中国地域のみならずにも本学および東亜同文書院大学を知っていただくきっかけとなったことと思います。来場された方々に厚くお礼申し上げます。



東亜同文書院大学から愛知大学へ
—広島展示会・講演会—

2014年10月21日(火)～26日(日)
広島県立美術館 第2展示室

開館時間 午前9時～午後5時 入館は無料
休館日 10月27日(月)～28日(火)
〒730-0292 広島県広島市東区本町2-2-2
TEL 082-251-2222 FAX 082-251-2223
E-MAIL info@hirokashi.museum.jp

10月26日(日) 講演会 無料入場券
13:00-13:15 入場券配布
13:15-14:00 講演1 宮田一郎氏
14:15-15:00 講演2 三好章氏
15:00-15:15 講演3 有森茂生氏

愛知大学東亜同文書院大学記念センター
〒466-8601 愛知県名古屋市中区栄3-1-1 TEL 052-253-4111 FAX 052-253-4112
E-MAIL info@aiichi-u.ac.jp

愛知大学東亜同文書院大学記念センター 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業



③シンポジウム「書院生、アジアに行く！東亜同文書院・大旅行調査研究の新たな地平をめざして」を開催

11月30日、東亜同文書院大学記念センター主催のシンポジウム「書院生、アジアに行く！東亜同文書院・大旅行調査研究の新たな地平をめざして」が愛知大学車道校舎で開催されました。これは文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の一環であり、本事業の研究プロジェクト「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」における「大旅行調査」研究グループによるシンポジウムです。

東亜同文書院の「大旅行」調査は、1907年（書院5期生）から開始された、卒業前の一大イベントであり、数名で班を編成して数か月間、中国大陸等の各地において調査を実施するものでした。30有余年にわたって20世紀前半の中国やその周辺を記録したコースの総数は700本近くに及び、その調査結果は調査報告書や大旅行記などにまとめられています。

本シンポジウムでは、徳島大学から荒武達朗先生をお招きして、「『東亜同文書院大旅行誌』から見た満洲の日本人」と題した基調講演をいただいた後、本学の教員や大学院生による、内蒙古、雲南、東南アジア、香港、台湾、華北における大旅行に関する7本の研究発表を行い、昨年度の国際シンポジウムに引き続いて大旅行調査研究の新たな地平を拓くことを目指しました。

当日は、60名の来場者をお迎えすることができ、フロアからも多くの質問や御意見を頂いて活発な意見交換を行うことができ、6時間間に及ぶ長時間の活気に満ちたシンポジウムとなりました。

愛知大学 AICHI UNIVERSITY

主催 愛知大学東亜同文書院大学記念センター／文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

2014年度 シンポジウム
「書院生、アジアに行く！東亜同文書院・大旅行調査研究の新たな地平をめざして」
と き：11月30日（日）／と ころ：愛知大学車道校舎K1001教室

東亜同文書院（のちに大学）は、1901（明治34）年東亜同文書院として中国上海に創設。開学以来に愛知する人々を養成を目的に、戦前戦後に設けられた日本の高等教育機関としては最も古い歴史をもつ、約5,000名を輩出した。

1907年、数名の学生で構成した班で約1ヶ月間調査する、書院生卒業前の一大イベント「大旅行調査」が誕生しました。20世紀前半の中国大陸やその周辺を記録した「大旅行調査」のコースは約700本近くに及びます。その調査結果は、調査報告書や大旅行記などにまとめられています。このたびは「書院生、アジアに行く！東亜同文書院・大旅行調査研究の新たな地平をめざして」と題して、大旅行調査を継ぐ方々から後継するシンポジウムを開催します。東亜同文書院が輩出した大旅行調査に及んで、ふたつに文脈から読み解く歴史を、今後の調査・研究に資することを期します。

時 間	演 題 内 容	演 者 名
13:00-13:10	開会式	（佐藤 元弘 愛知大学学長）
13:10-13:15	基調講演（三好 亨 愛知大学現代学部長）	
13:15-13:20	休憩	
13:20-13:40	第1分科会「東亜同文書院大旅行調査から見た近代の日本人」	荒武 達朗（徳島大学文学部）
13:40-14:10	第2分科会「東亜同文書院大旅行調査から見た近代の日本人」	佐藤 元弘（愛知大学文学部）
14:10-14:15	第3分科会「東亜同文書院大旅行調査から見た近代の日本人」	佐藤 元弘（愛知大学文学部）
14:15-14:45	第4分科会「東亜同文書院大旅行調査から見た近代の日本人」	佐藤 元弘（愛知大学文学部）
14:45-15:15	第5分科会「東亜同文書院大旅行調査から見た近代の日本人」	佐藤 元弘（愛知大学文学部）
15:15-15:45	第6分科会「東亜同文書院大旅行調査から見た近代の日本人」	佐藤 元弘（愛知大学文学部）
15:45-16:15	第7分科会「東亜同文書院大旅行調査から見た近代の日本人」	佐藤 元弘（愛知大学文学部）
16:15-17:00	大旅行調査の意義とその発展について	佐藤 元弘（愛知大学文学部）
17:00-17:45	閉会式	
17:45-18:30	懇話会	

【お問い合わせ】 愛知大学東亜同文書院大学記念センター Tel 0532-47-4139 Fax 0532-47-4196
E-mail: toa@msaiichi-u.ac.jp ホームページアドレス: <http://www.aichi-u.ac.jp/orc/index.html>



④国際シンポジウム

「東亜同文書院の中国研究―その現代的意味」を開催

愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催国際シンポジウム「東亜同文書院の中国研究―その現代的意味」が12月13日、愛知大学豊橋校舎記念会館小講堂において開催されました。これは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の一環である「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」の「東亜同文書院の教育と研究システム」研究グループによるシンポジウムです。

シンポジウムでは、まずジョージア大学のDouglass Reynolds教授によるTo-A Dobun Shoin and Its China Study Curriculum とは書院の中国研究がbottom-up型であり、アメリカのtop-down型とは全く異なること、元ミシガン大学ライブラリアンの仁木賢司氏による『東亜同文書院との私的出会いについて』北米に於ける極東アジア学科とその資料』は、全米を一つの書庫にとの理想を挙げられました。潮州・韓山師範学院の湯原健一氏による『語学学習者の受け皿としての満洲』は、書院による中国語教育が報告され、明治大学石井知章教授による『根岸信と中国ギルドの研究』は書院初期の教授根岸の中国社会科学の有用性を述べられ、愛知大学三好章教授による『東亜同文書院の20世紀中国社会論』は、書院の中国研究を日本の中国研究史の中に位置づけました。

午前午後6時過ぎまでという長丁場にも拘わらず、60人以上の参加者があり、熱く討論を重ねました。

また、翌14日には報告者全員によるシンポジウムの総括と、今後の研究の進め方等に関する研究会が開かれました。

主催 愛知大学東亜同文書院大学記念センター／文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

東亜同文書院の中国研究

―その現代的意味

10:00～10:10 総旨説明
10:10～11:30 基調講演
ダグラス・レイノルズ (ジョージア州立大学教授)
"To-A De-bun Shoin and Its China Study Curriculum: A Global Perspective."

11:30～12:15 大学記念館ギャラリートーク(入館無料)

13:00～13:45 三好 章 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター長)
「東亜同文書院の20世紀中国社会論―根岸信と内田匡作を例として」
13:45～14:30 湯原 健一 (潮州韓山師範学院講師)
「語学学習者の受け皿としての満洲」

14:30～14:40 休憩

14:40～15:25 ニキ・ケンジ (元ミシガン大学ライブラリアン)
「東亜同文書院との私的出会いについて」―北米に於ける極東アジア学科とその資料―

15:25～16:10 石井 知章 (明治大学教授)
「根岸信と中国ギルドの研究」

16:10～16:25 休憩

16:25～17:30 総合討論

とき 2014年12月13日(土)
ところ 愛知大学豊橋校舎 記念会館小講堂

予約不要・入場無料 当日は大学記念館展覧室にもご覧いただけます(入館無料)

【お問い合わせ】 愛知大学東亜同文書院大学記念センター
Tel 0532-87-4139 E-mail: toa@ml.aichi-u.ac.jp
ホームページアドレス: <http://www.aichi-u.ac.jp/orc/index.html>



⑤ワークショップ「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係の再検討」を開催

2015年1月17日、愛知大学車道校舎にて東亜同文書院大学記念センター主催のワークショップ「東亜同文会、東亜同文書院と日中関係の再検討」が開催されました。

本ワークショップでは3名の報告者による研究成果が報告されました。

第1報告は、東亜同文書院大学記念センター・ポストドクターの野口武氏が「『日清貿易研究所』研究の成果と課題——東亜同文書院前史としての位置付けと荒尾精の評価について」という題で、東亜同文書院の前身的存在と捉えられてきた日清貿易研究所、ならびにその所長だった荒尾精に関する先行研究の整理について、資料を踏まえつつ詳細に論じました。

第2報告は、東亜同文書院大学記念センター研究員の武井義和氏が、「東亜同文書院中華学生部と日本へ学生たちの日本見学旅行を中心に」という題で、1920年代から30年代初頭に定期的に行なわれていた中華学生部学生による日本見学旅行について、旅行の全体像や学生たちの日本への印象、祖国中国への認識などを明らかにしました。

第3報告は、一般財団法人霞山会文化事業部の堀田幸裕研究員が、「東亜同文会から霞山会へ」という題で、東亜同文書院（大学）の経営母体であった東亜同文会が日本敗戦直後に解散して以降、1948年誕生の霞山俱樂部を経て財団法人霞山会が成立した経緯、そして1960年代までの霞山会の状況などについて発表しました。

発表後、大里浩秋神奈川大学教授と馬場毅名古屋教授により各報告者にコメントと質問が出され、またフロアからも質問が相次ぐなど、活発な意見交換が行なわれました。そこでは従来東亜同文書院の前史と位置づけられている漢口楽善堂、日清貿易研究所などを1880年代の日中関係の中で位置づける必要性、さらに荒尾精、根津一の初期に於ける軍事情報収集とビジネス活動に関する情報収集をどのように位置づけるか、東亜同文会のアジア主義に基づく「支那保全論」と東亜同文会の義和団期における連邦国家論、辛亥革命期における南北国家論をどのように理解するか、さらには同文書院スパイ説は根拠のないレッテル貼りであるが、中国の立場からの評価へも留意すべきであるという指摘がなされました。さらに東亜同文

書院中華学生部学生が、抗日運動の絶え間なく起こった1920年代に日本訪問した際の抗日的視点とは異なる異文化理解のあり方、その他、戦後東亜同文会から霞山会創立に至る過程で、霞山会が東亜同文会をどのように思想的に総括したかが議論されました。さらに東亜同文書院大学の廃止から愛知大学への創立にかけての時期、両者の関係について議論がされました。

報告者の発表内容は、いずれも先行研究が手薄な分野、または一般的に知られていない事実が取り上げられたものであり、東亜同文会および東亜同文書院研究に新たな光を当てるものになったかと思えます。

ワークショップは会場がほぼ満席になるほどの40余名の来場者があり、盛況のうちに終了しました。



2015年
1月17日（土）
13:00～16:40

愛知大学 車道校舎 13 階
第 3 会議室

本ワークショップでは、東亜同文会が前身となった日清貿易研究所、またそれを発展させたキイパーソンであった荒尾精についての多面的な評価について、さらに東亜同文会が、初期における東亜同文書院を継承して東亜同文書院内に中華留學生のために設置した中華学生部、さらに東亜同文会から戦後への霞山会への継承という、3つのテーマを通じて約半世紀にわたる東亜同文会、東亜同文書院の日中関係での役割について、議論したいと思います。

報告内容

- 12:50 受付開始
- 13:30 総司会 馬場毅（愛知大学名誉教授）
- 13:50 野口 武
（東亜同文書院大学記念センターポストドクター、愛知大学非常勤講師）
『日清貿易研究所』研究の成果と課題——東亜同文書院前史としての位置付けと荒尾精の評価について
- 13:55 武井 義和
（東亜同文書院大学記念センター研究員、愛知大学非常勤講師）
東亜同文書院中華学生部と日本へ学生たちの日本見学旅行を中心にへ
- 14:50 堀田 幸裕
（一般財団法人霞山会文化事業部研究員）
東亜同文会から霞山会へ
- 15:10 休憩
- 15:20 コメント1 大里浩秋（神奈川大学教授） コメント2 馬場毅
- 15:55 総司会 司会：馬場毅 （12：10 終了予定）

<主 催> 愛知大学 東亜同文書院大学記念センター
愛知大学私設人文学部研究員 文部科学省私設人文学部研究員 文部科学省
<お問い合わせ> 012-470-1310 E-mail: aichu@u-aichi.ac.jp
URL: http://www.aichi-u.ac.jp/

愛知大学 東亜同文書院大学記念センター ワークショップ
東亜同文会・東亜同文書院と
日中関係の再検討

予約不要・入場無料



⑥書籍『愛知大学公館100年物語―旧陸軍第15師団長官舎から「知のサロン」へ」を刊行

2015年で建設104年を迎える愛知大学公館は、当初旧陸軍第15師団長官舎として建設されました。本書は公館そのものだけでなく、その背景や時代環境にもふれ、一般の方にもわかりやすく書かれております。また、写真図版については、新村猛氏をはじめとした写真家の作品や、ドイツ人建築家ラングリーガー氏の図面をベースとした豊富なものとなっています。

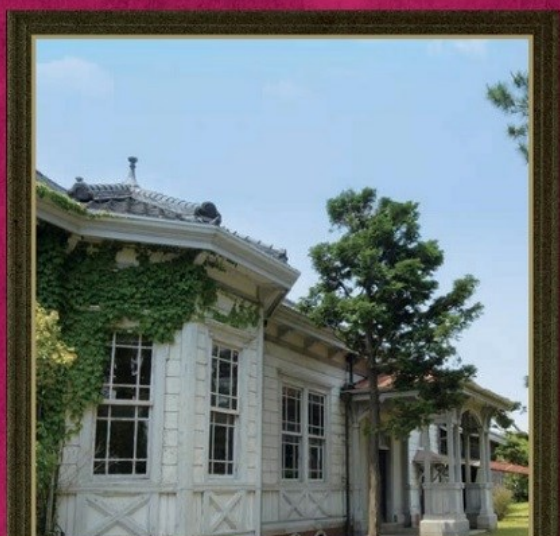
愛知大学東亜同文書院記念センター 編

B5判／並製 55頁 ISBN978-4-86333-089-6 C0021

本体価格 926円＋税 2015年3月30日発行

愛知大学公館100年物語

―旧陸軍第15師団長官舎から「知のサロン」へ―



世紀を越えた ドラマチックな物語

愛知大学東亜同文書院大学記念センター 編

目 次

I 愛知大学公館100年物語

第1章 公館(師団長官舎)の誕生

1. 豊橋に旧陸軍第15師団を誘致

(1) その前史をみる

(2) 豊橋への第15師団の誘致とまちづくり

2. 第15師団師団長官舎の完成とその構成

(1) 師団長官舎が高師の丘に完成

(2) 師団長官舎の構成は和洋折衷のオリジナル

3. 歴代の師団長の変遷と久邇宮殿下師団長への歓迎

(1) 歴代の師団長は7人

(2) 久邇宮殿下邦彦王の着任と良子女王の婚約内定

(3) 軍縮による第15師団の廃止と施設利用

第2章 愛知大学「公館」としての再生

1. 愛知大学の設立と公館

2. 公館利用の展開

第3章 公館の再評価

1. 建築史上からの再評価

2. 公館への夢と熱き想い

II 愛知大学公館アルバム

●写真集

北側外観、南側外観、館内洋室と和室

●資料集

陸軍第15師団長官舎・愛知大学公館関連年表
 接收の危機を乗り越えた公館

「公館見学会」参加者アンケート結果



特別掲載

〔愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催 広島講演会 講演録（2014年10月26日 広島県立美術館）〕

東亜同文書院関係の史資料収集とコレクション紹介

有森 茂生 〔第19回東亜同文書院記念基金会奨励賞受賞者、愛知大学法経学部卒〕

藤田 佳久 〔愛知大学東亜同文書院大学記念センター・フェロー、愛知大学名誉教授〕

司会 東亜同文書院関係の史資料収集と、コレクション紹介というかたちで、お話をさせていただきます。講演は有森茂生さん、そして藤田佳久名誉教授からお話をさせていただきます。

実は有森様ですけども、1977年愛知大学法経学部を卒業なされまして、卒業後も本学の同窓会の岡山支部のほうで本学へのご支援をいただいております。卒業後、上海にも二十数回、訪問をなされておられまして、それを通して有森さんのお気持ちとされては、日中間に関する研究の支援をしたいという強い思いを持たれられておられます。その研究に繋がるような古き良きものをインターネッ トオークションにて購入なされ、その購入なされたものを、愛知大学東亜同文書院大学記念センターに毎年寄贈いただいております。

東亜同文会から東亜同文書院の歴史を考える上での貴重な品々をいただいているものですから、これに関する内容を今日こちらの広島で講演をさせてもらうかたちになりました。それではお話をいたしたいと思います。

なお、それに伴いまして、その背景になるところを、本学の名誉教授で、現在愛知大学東亜同文書院大学記念センターフェローというかたちで、東亜同文書院関係の研究の第一人者であります藤田先生にサポートをいただくかと思っております。先生はこの間、東亜同文書院の中国大調査旅行の研究等々、書籍物も沢山執筆されておられます。実は受付にも置かせてもらいましたけども、『日中に懸ける―東亜同文書院の群像』や研究書等々も皆さまにお渡しできるかたちをとらせてもらっております。

それでは、お二方の先生方、よろしく願い致します。

有森 岡山の有森と申します。2ヶ月前ぐらいに、この講演会に、聴衆となつて参加したいと思っておりましたが、まさかこちらに講師として来て欲しいというお話をいただけたとは全く思っておりませんでした。意外ですが、光栄です。私は、昭和48（1973）年に愛知大学に岡山の関西（かんぜい）高校から入学しましたが、前年一浪してる間に当初の日本史学希望から、中国法律学科を選択して入った次第です。さて余談になりますが、今年の岡山の関西高校は夏の甲子園大会に出場しまして、一回戦で敗けてしまいました。昨日、同文書院卒で日本中国語検定協会の宮田一郎先生とお話させていただいていると、関西高校で中

国語を教えているクラスがあるということをご存じでした。本当に感激でございます。関西高校の青木教頭先生にこの話を伝えて、もつと愛知大学に学生を進学させてほしいといったこともお願いしたいと思っています。また、愛知大学でも推薦校に加えることになれば良いのですが。

さて、愛知大学卒業後、インターネットメールで上海に友人ができてまして、その友人から「上海の昔の地図を集めているが、戦後詳細な地図は中国で発行されていないので、戦前のものを使い回しされている。それで使い古しになったボロボロのしか入手できないので、日本で何とか探してもらえないだろうか」といったことでした。それで、一番古いのは明治20年頃の北京の地図あたりから手に入れて、十枚ほどを上海に送りました。見返りはいつさい求めず、中国に行ったらば朋友(ポンヨウ)としてよろしくお願いしたいということで、その後、上海へ岡山支部卒業生が行った時に、中国人価格で大型バスを日本円で一万円程度で借りていただき、行きたいところに行つたという形です。こういった資料収集の中で、インターネット上で上海を検索していくと、東亜同文書院関係の資料も散見しましたので、それからどんどん集めていく形になっております。その都度記念センターストに送って、藤田先生、武井先生の喜ぶ声で満足しながら、今に至っております。コレクション紹介ということで、こ

ういった画像で案内させていただきたいと思えます。

藤田 今のようには有森さんには、我々センターストは頭が上がりません。お恥ずかしいかもしれないんですけど、本当に貴重な資料を次々と見つけていただいています。我々のほうも独自のものを持つております。書院の卒業生から寄贈されたうち、孫文の特に生資料は日本が一番多いです。しかし、それもふまえて有森さんは書院全体の貴重な生資料をインターネット上から集めていただき、こういうことが出来るんだと非常にびっくりしています。そこで今日は有森さん中心に集めていただいた物をずっとご紹介しながら、私のほうは、それにちよつとコメントするぐらいで終わらせていただきたいと思います。

まずこの三人の方です。書院は、この三人の聖なる人を三聖人と呼んでおられます。一番左から、近衛篤磨、真ん中が荒尾精、一番向こうが根津一です。展示のほうにもありますけれど、もう一回復習で簡単に申しますと、近衛篤磨、彼は二度ほどヨーロッパ行きまして、ヨーロッパから東アジアを見た。特にヨーロッパの列強の東アジア戦略も合わせて勉強して帰ってきた人です。後に日露戦争は避けられないと考え、彼が全国行脚で講演をして日露戦争に至った。本人は東南アジア経由で帰ってきたこともあったんですけど、開戦の1

ヶ月前に日本の医療技術では治らない病気で亡くなつてしまいました。大変惜しいことをしたわけですね。後出てきます近衛文麿はその息子さんですけども、戦時中総理大臣にもなった。あるいは書院の会長、院長にもなった。だから、この方がもう少し長生きしておれば文麿公に対する教育がもつと徹底的にできて、日本も大分変わつていたかもしれない感じが致します。この方が清国の高官の人たちとの了解を得て、先ほどちよつとお話しましたようなかたちで日中間の文化交流事業を始め、南京同文書院という学校をオープンして、そこ日本人と中国人合わせて勉強させる計画でした。ところが、すぐ中国側は学生を送りたいが現地での学校の建物が間に合わない。そこで彼は東京へ帰って自分の目白の私邸の土地の一角に建物を建てて、東京同文書院と称して、中国人の留学生を受け入れたのです。一つそれはずっと続いたものですが、書院のほうで留学生を受け入れるのが少し遅れ、中華学生部が出来るのは少し後になります。そういう清国との交流の切り口を開いた方なんです。

それから荒尾精は、先ほど申しました、貿易実務こそが日本と清国との提携でお互いのレベルを上げるんだという。清国へ行つて、清国との日中貿易をやる上での基本的な調査も色々やつて、『清国通商総覧』という大きな本を書くことをやった方です。軍籍があつた

からスパイではないかというふうに言われたんですけれど、彼は軍籍を外して行きたかったけれども、当時の中国で軍籍を外して行ってしまうと、一介の日本人になってしまうて、どんな不幸な目に遭うか分からないというわけで、むしろ軍部側がそういう意味で軍籍を付けて行けつていうふうに言つて軍籍で行ったんですね。後に軍籍を外れております。

根津一はその親友で、当時は教育機関というものはあまりありませんでしたから、陸軍、軍関係の学校へ行った人ですけど、その友達とて言いますか、最も親しい心友です。しかし根津一のほうが一つ歳が上でですけど、彼を東亜同文書院の院長に頼んで、一番長く勤めますね。66歳まで彼が生きる。一方、荒尾精は残念ながら更に東南アジアとの交流も図ろうと台湾へ行って数日後にペストにかかつて38歳の若さで亡くなつてしまいます。いずれも、こういう構想で実行したのはみんな20歳代です。

20歳代の青年たちがこういう構想を抱いて、それで実現した。これはまさに明治ならではということかもしれません。今それほどのことの出来る20歳代の人というのは、制度が体制化したところもあるからなかなか出来にくいかもしれませんけど。そういう人たちは顔写真見ると若い時のイメージが想像できないかもしれませんけど、皆、髭を生やしており、そういう若人の人たちが大陸へ渡つた。その背景には西南戦争とか、会津戦争とかがあつて、

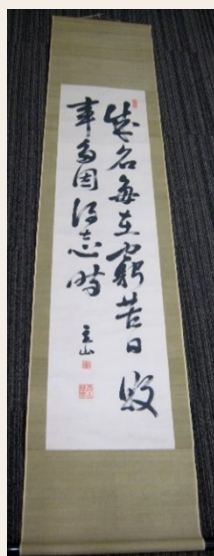
そこで敗けた若者たちが、明治政府の下ではもう自分たちは登用されないというわけで、中国へ渡つて、そちらのほうで活躍したいと願つた人たちでもありました。そういう背景もあるんです。そういう人たちを上手く登用しながら調査活動をやつたりしたつていうことがあるんですね。最初にまずそのことだけちよつとお話しておきます。

有森 ありがとうございます。さて、近衛篤磨が劉坤一に要請し、初めて南京に同文書院ができました。1900年、明治33年の5月12日が開院式となります。こちらは今まで世に現れてなかった写真ですが、明治時代の『太陽』という、博文館が出版している総合雑誌の明治34年6月号に載っていました。上が教師と生徒との集合写真。下が劉坤一両江総督代理の上海道台(地方長官)が祝辞を述べられている写真です。

この太陽という雑誌になぜこういった情報



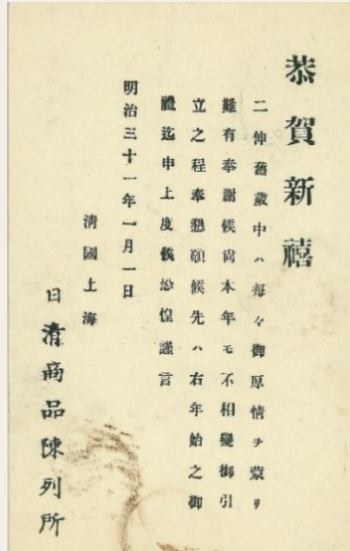
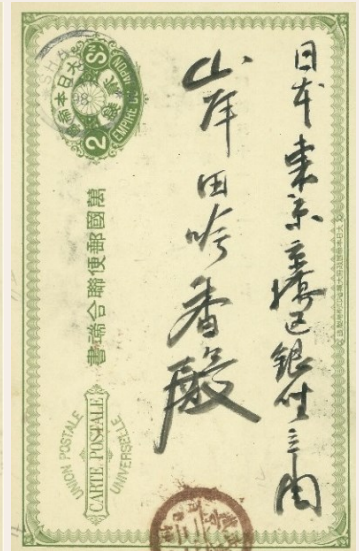
が載っているかと言いますと、明治31年に近衛篤磨が日清提携の論文を太陽へ初めて出しており、それ以降も、近衛篤磨とこの博文館に繋がりがあつたではないかと思われまふ。さて、近衛篤磨の書をご覧下さい。



藤田 苦しい時を過ぎれば上手くいく時があるという、そういう内容です。

有森 (岡山県)旭町教育委員会出版の岸田吟香伝ですが、これを出された時の旭町長は山崎公民で、同文書院の卒業生です。そういうことで地元の方、岸田吟香は同文書院への入学を故郷の人へ働きかけたのかもしれない。郷土のヒーローを尊敬した後輩が同文書院を目指したと思われまふ。さて、これは愛知大学の校名がある校章についても、岸田吟香の息子の岸田劉生門下の高須光治が昭和22年6月に創っているという縁があります。

これは私が見つけました、岸田吟香宛ての日清商品陳列所からの年賀はがきです。これも次に出てきます日清貿易研究所と関係があり、その歴史は古いのですが、荒尾精と根津一がその日清貿易研究所を作りまして、日中貿易執務に携わるものをそこで養成すると

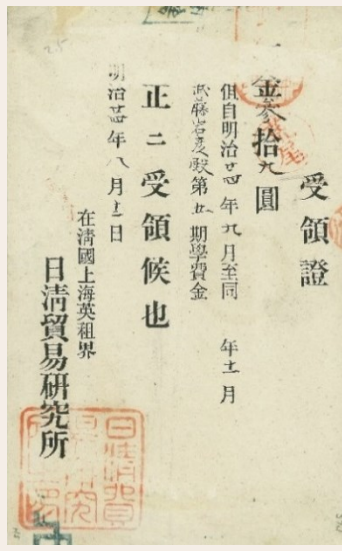


いうことになりました。

日清貿易研究所の卒業生は69名でしかなかった上に、一期で終わりました。卒業した者の中から40名ほど、日清商品陳列所で実務に携わる活動に参加しました。わずかに40名の残ったメンバーが頑張っていたが、明治31年の元日までは、まだスポンサーとして岸田吟香との繋がりが証明されてる史料とっております。

これは日清貿易研究所の「受領證」です。興味深いのは「金参拾九圓」のところに荒尾精の印鑑が押されているんです。3ヶ月の学資金で金参拾九圓なのです。一円は現在の一万数

千円にあたります。これはセンターの研究員、武井先生のお話では、同時期の東京の専門学校の学費よりもかなり高い金額だったということです。研究所の学費が高い高いとは言われていたのですが、3ヶ月間でこの金額というのは、初めて史料として実証されることになったようです。



尚、センターに寄贈しました劇作本「荒尾精」において、「研究所は親から金をだまし取るんだ」といったようなセリフが入っていますが、高額な学費が悪い噂の元になったのではないかと考えています。尚、この「受領證」が今までなぜ残っていたかといえますと、上海郵便局の珍しい消印が押されていて、切手収集家が保存していました。はがきの表を見ていた時は気にならなかったのですが、裏の「日清貿易研究所」という名を見てから、これは何としても確保しなければならぬなと思いました。研究所のデータや、今日展示されている写真はあれだと思うのですが、それ以外の実史料はこれ以外におそらく無いのではと思っております。

す。

これは岸田吟香が明治14年に出版の申請をして、明治15年に発行された『清國地誌』です。明治になって日本で初めて本格的な中



国、清国のことを記した書籍になります。これは国会図書館の近代デジタルライブラリーとかにはありますが、三冊揃っているのは神田の神保町(の古書店街)を探しても、数年前に行った時は一組だけありました。なかなか得がたいようです。岸田吟香が幕末の文久3年に、挙母(ころも)藩の研修生として江戸に行った時に目を患って1ヶ月苦しんだ挙句、

「横浜居留地39番館のヘボン先生のところに行けばいい目薬があるんだよ」ということで行きまして、目薬をもらったら1週間で治ってしまつた。その後、ヘボン先生から目薬の作り方を教えてもらって、それを精錡(せいき)水として販売するようになった。そして、どんどんそれが売れ出して、中国に上海樂善堂を作りました。すると、その上海樂善堂に陸軍士官学校を卒業して、連隊勤務を終えた荒尾精が川上操六参謀次長の命を受けて、情報収集で上海に行った時に親しくなり話し込んだ。岸田吟香と荒尾精が意気投合しまして、樂善堂の漢口支店、今の武漢市なんですが、そこのお店の経営を任せられる中で、荒尾精は目薬販売だけでなく、情報収集の活動の中で日清友好が大事だという考えで、軍を辞めて、そして、荒尾精と根津一で東亜同文書院の活動に飛び込んだという流れになつていきます。その清国に関する関心を表した岸田吟香の著作『清國地誌』です。これがあるからこそ清国への関心を強めていったのではないかなと思われまふ。この『清國地誌』で、またいつか藤田先生がこれの関係を研究されるのか、楽しみにでございます。

藤田 今読ませていただいております。

有森 さて、南京同文書院ができましたが、義和団事件で清国と八カ国連合軍との戦い

が始まりました。南京同文書院が開校したのが1900年、明治33年5月ですが、義和団事件が始まったのがその6月頃です。開始後治安が厳しくなり、上海へ移つて東亜同文書院の開校となつたという流れになつています。



これは桂墅里(クイシュリ)校舎での第二回卒業式の、卒業証書授与の写真です。1905年、明治38年挙行されたものです。

桂墅里校舎で第一回の開校式が1901年、明治34年5月でした。商務科がまずスタートし、続いて政治科が設置された形になつていきます。これは今でも中国の杭州、西湖に行かれましたら、たぶん工場に案内されることがあ

るかと思いますが、杭州の工場で作られた根津一のタペストリーです。



根津一は初代院長として1901年、明治34年から明治35年の間、書院で院長を務められました。ちなみに毎年2月18日に「梅花忌」として、京都の桃山の月橋院というお寺で法要が営まれています。毎年十数名の参加があります。今後もこういった先達をまつる活動に参加したいと思います。

こちらは第2代目院長、杉浦重剛の「天道台土還暦祝賀」記念はがきです。この方は1902年、明治35年から1903年、明治36年の間院長を務められました。この同文書院の時代ではないんですが、日本の中学だったかな、そういうところの校長だった時代に、ある生徒が飲んだくれて道で寝転んでいる姿を新聞社に撮影されてしまって、ほかの学生は「学校の恥だ、そいつを退学させろ」と息巻いていたところ、杉浦重剛は彼は学校にいてもこんな様なんだから、社会に出してしまつたらどん



(全記實成博道士通合天)

なごろつきになるか分からない。今退校させろと言っている君たちは学業優秀、品行方正なので、今君たちが社会に出ても何の問題にはならないので、彼を出すというなら君たちを出すべきだ」と言つて、最後までその学生を擁護したという逸話があります。この杉浦重剛は、学生を成功へ教え導くタイプだったと言われています。ちなみにその酔っ払った生徒は江見水陰と言い、明治時代の有名な作家になったということで聞いております。ほかに逸話はまだあるようでして、昭和天皇の皇太子時代に倫理の教育担当者を決める時、東京帝国大学教授の山川先生が会員のメンバーとほかに思い当たる者がいないという中で杉浦重剛はと言われ、その時参加している皆ははたと手を打つて、彼こそ品行方正で落ち度の無い方だと、全会一致で決定となったとのことです。

藤田 校舎が最初できた時は、先年に上海万



博をやったあたりの場所だったんですけど、隣に清国の軍事工場があつて革命戦争が起ると、打ち合いをやつて、工場に弾が当たつてしまつて、校舎が焼けてしまつたのです。二番目にはフランス租界の北側のフランス人の倉庫の所を借りて校舎としたんですけど、やつぱり狭いというんで、いよいよ三番目に本格的なこの建物を建てたんですね。根津先生は最初にこの建物を建てるにあつて設計図から工事費等を持ち逃げされてしまうことがありました。そこで自分がかつて書生として雇つておつた建築系の技師を呼んでもう一回改めて作



り直した。隣に先ほどから話が出ている南洋大学(今の上海交通大学)ですね。フランス風の瀟洒な建物、そしてすぐ外側はフランス租界ですから、そういう建物に負けないようなおしゃれな建物を造つたのです。だから、これが戦争で燃えてしまうまでは上海で絵葉書にずっと利用されています。非常に瀟洒な建物で、敷地は今の愛知大学のキャンパスぐらいの広さがあります。ここで、東亜同文書院は全盛期を迎えます。ここから約20年ぐらいは最高の時であつたと思います。

有森 これは、虹橋路(ホンチャオロ)校舎の完成直後に作成された校舎全景で、全ての施設がこの一枚に収まっています。これはインターネットオークションでなく、郵送オークションでこれをずっと前に手に入れていました。

さて、次の写真を最初インターネットで見た時、このデモ隊の持っているプラカードに「同文書院中華学生部」と書かれているのを発見しました。中華学生部は、これは1918年に設置されて、募集停止は1931年でした。その間、この上海でのこういった学生のデモに同

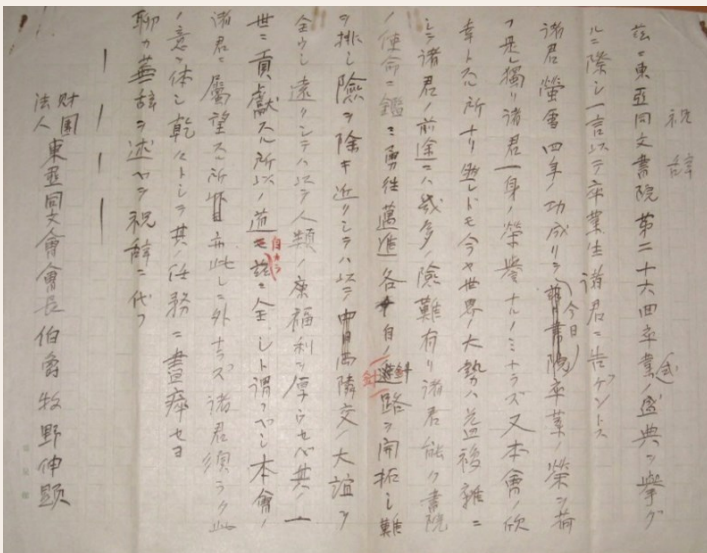


文書院も参加できて、周りに女性、子どもも入っている平和な姿が見えます。

霞山会館で、書院41期の高瀬恒一様によりますと、「五・三〇事件の反日デモのさなか、1926年に上海で交通大学と懇親の連合運動会を書院が行なった。それは真の友好関係があつたからではないか」とお伺いしていました。この女性が行進している写真が二枚ほどありました。

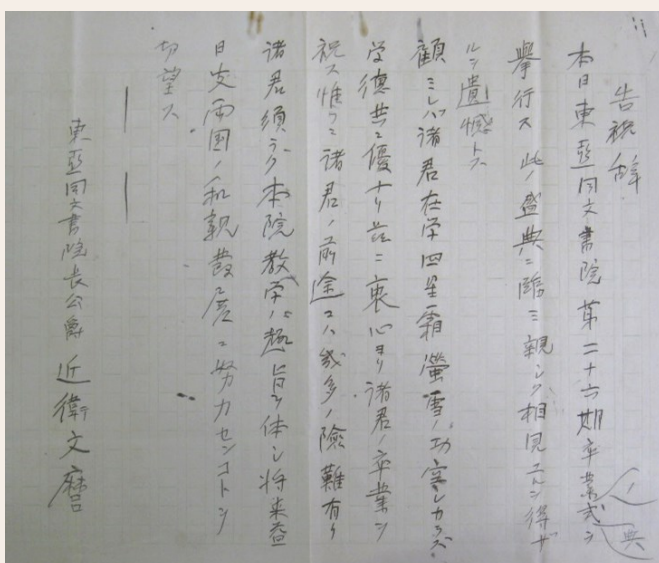
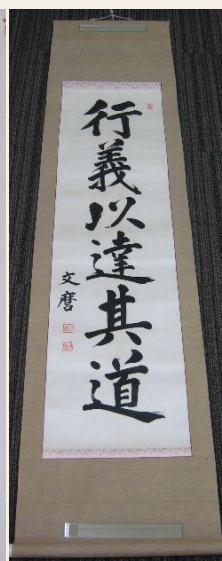
同文書院の文字は入っていませんでしたので、これ一枚だけになったと思います。

これは東亜同文会会長の牧野伸顕が書かれた、同文書院26期卒業式祝辞草案です。



26期は大正15(1926)年4月に入学し、昭和5(1930)年3月に卒業された学生で、本原稿は昭和5年3月の卒業式で述べられた草案です。牧野伸顕は大久保利通の次男にあたります。

生後まもなく大久保利通のいとこの牧野家の養子になった時、すぐに牧野家の当主が亡くなり、大久保家で牧野伸顕はそのまま暮らしていました。



さん声が小さくて歌が聞こえなかったんです。聞こえてもテンポがものすごくゆるかったもので実際に、本当にこんなゆっくりした歌いい



のかと思っていました。そのため、このレコードで元氣な「長江の水」を初めて聞き感激した次第です。今までのレコードを三枚見つけ二枚確保して、記念センターにお届けしました。またこのあと、展示会場でこの音を鳴らしますので、ぜひ楽しみにしていただけたらと思っています。(レコード作製の昭和15年6月から大学令によって、東亜同文書院が東亜同文書院大学に昇格しました。これで予科2年学科が3年という中身になりました。

ところで「上海租界内の公園は大と中国人は入るべからず」といったようなことを聞かれたかと思えます。この「大と中国人は入るべからず」という立札の撤去を1927年の4月、上海での租界内の納税者大会で撤去することが決議されました。1928年6月に立札が撤去されました。こちらの資料は、上海ジエスフィールド公園の年間入園パスでございます。有効期限をみますと、1928年の6月1日から翌年の5月31日となっております。



つまり、実際は有料化をして、富裕層と西洋人以外は公園に入れさせない形をとったと思っております。また、これは書院生が上海で実際に生活している頃の、戦前のトロリーバスの切符と乗り換え券でございます。



さらにこれは、南京シアターの入場券の半券で、月曜夕方の入場指定のものです。



上海での同文書院の方の生活を再現するような企画がある時には、こういった生活資料は役立つのではないかと思います。ありがとうございます。では藤田先生、よろしくお願いします。

藤田 ということでありまして、日中戦争下ですね。しかし、東亜同文書院は大学として昇格し、予科と学部のある五年制の大学としてスタートしたわけであります。やがて昭和

18年には学徒出陣等があつて、学生の方々は主に通訳従軍をしたわけです。特に上海の日本人の居留民の方々の圧力がありました。それまでは圧力があつても一切、軍部の要求も強くはねのけてきたんですけど。卒業も早めに、あるいは学年も早めにとりうな措置があつたりして、最終的には45年8月、終戦によつて閉学をしました。ただ、あちらの展示にありますけれど、最後の年は東亜同文書院の学生は長崎から上海へ船で渡れませんでした。アメリカ軍の潜水艦攻撃等のためですね。

中国におつた方で上海へ進学した人は大丈夫でしたけれど、日本から行くと思つた人は、富山県の呉羽、当時の飛行機を軍事工場転用でやつていましたけど、元々は呉羽紡、その一角を借りたのです。呉羽紡の副社長は書院の卒業生でした。社長も理解のある方でした。そこへ、東亜同文書院の呉羽分校つていうのを作つたんですね。本間先生は上海におりましたから、戦局激化の中、これは日本が危ないつていうことが分かつていたんですね。そこで、書院のスタッフの内から26人を選抜して呉羽校舎へ送ろうとしたんですけど、軍部がそれに気が付いて逃げるんではないかというわけで反対、さらに日本の居留民団のほうも反対運動がおこつて結局は縮小して13人の先生方を送つて、そこで1年生向けの教育をやつたんです。

8月15日、やっぱり閉学をせざるを得なく

なつたんですけど、この分校長の佐伯さんが、あちらにも展示にも書いてありますように、日中間でこれだけ貢献した学校はこれまで東亜同文書院以外他にはないと主張したのですね。日中間の交流事業は一番密接にやつてきたと。そういう点でこういう学校を潰すつていうのは今後の日中間係にとつても非常にマイナスであるというようなことを含めて陳情書を政府へ出すわけです。その結果、存続を認めるという許可書とでもいいいますかね、書類が届きます。印鑑を押したのは当時の外務大臣、吉田茂です。ここに東亜同文書院は終戦後、復活したんです。秋に復活したんです。学生はまた数百人そこに戻つてきて入つたんですね。ところが、先ほど出て参りました近衛文麿が、書院の経営母体である東亜同文会の会長役をやつたわけですね。この文麿さんがGHQによる東京裁判の關係で、呼び出されて、その前の日に自殺をしてしまつたんです。というところで、どういうことになつたかという経営母体の東亜同文会がその後、GHQによつて潰されてしまいました。そのために東亜同文書院は財政的基盤を失つて、せつかく復活したのに潰れざるを得なかつたわけですね。

そこで、上海にまだいた本間院長、最後の学長はそれに代わる学校をすぐ作れと分校へ伝えてきたのです。自分は学徒出陣等で学業仲間の学生を戦場に送り出してしまつた。彼らが帰つてくると行く学校がない、その学生の



ために至急、学校を作れというわけです。呉羽校舎の中に丁度、愛知県出身の神谷先生がみえて、その方が東海地方で豊橋市街は戦災でやられました。豊橋には陸軍教導学校から、最後は予備士官学校になつていたキャンパスと施設がそのまま空いていて、そこへつばをつけたんですね。木更津とか別府とか色んな候補地がありましたけれど、豊橋が一番便利であろうというわけです。豊橋の、元々は陸軍15師団の司令部の建物なんですけどね。約五万坪の土地です。戦後としては全国で非常に広いキャンパスになつたんです。東亜同文

書院つて名前はGHQが許しませんでしたから、土地柄もありますし、知を愛するっていうのは非常にいいんじゃないかって本間先生の考え方で愛知大学つて名前ここにオープンしたんですね。その時の師団長が、正面の二階の部屋ですけど、学長もそこに入った。今はこの建物が、今回色々展示しました展示物を含めて記念センターの展示施設になっております。後のスライドで若干その中が見えますけれども、是非豊橋へお越しの際は豊橋駅から渥美線という電車があり、愛知大学前という駅があつて、降りるとすぐ大学の門になっています。そこから入っていただきますと、この建物がありますので是非お出で下されば、大変ありがたいと思います。これが今、我々の活動の拠点になっておるといふことであります。中はこんな感じですね。

左側は根津先生のフロックコートです。お金の問題で東亜同文書院は、やっぱり苦しみます。当時の藩閥政治によるお役人時代でもありましたし、近衛篤磨公は、彼はそういう役人嫌いでしたからなかなか思うようにお金を援助されませんでした。いつも金策に走り回っておられたんですね。だから、このフロックコートを根津先生は夏も着ていた。もちろん冬もこれを着てた。一着しかなかったというふうに言われております。その貴重なのをここに展示してありますが、実物をそのまま展示しておくともた変色したりするっていうんで、今は

これはレプリカに変えてあります。その他、階段にも一部掲示してありますけど、近衛家の方々の篤磨さん以下の揮毫等も展示してあります。

一番正面の額は黎元洪という人ですね。この方は民国時代の大總統になった人です。この方も非常に面白い人で、辛亥革命の時に漢口、漢口といつても昔はちよつと地名が違いますけど、そこで辛亥革命に成功した時、革命軍が電報で勝つたつて全国に知らせた。情報



戦ですね。そういう勝つたというのを見たために各地の清国軍は、あ、負けたのかという感じで辛亥革命が成功するわけです。その真つ先に敗けた清国側の軍隊の責任者が黎元洪という人でありました。勝つた革命軍は有名人がいないので、勝つたけれど誰を代表にしたら知名度があがるか、というところで敵の大將を自分達の大將にもつてきたんですね。その後、革命政權が誕生して、袁世凱がトップになりますけど、その後釜として大總統になったという、なんと言うんでしょうかね。面白い経歴なんですけど、書院が20周年を迎えた時に大きな揮毫を書いてくれたんです。従つて中国とか台湾から、これを見学に来た方々は彼の書を見て驚きますね。

色んな展示室があります。真ん中に学籍簿があります。先ほど三好(章)先生は身体に巻きつけてつていうお話ありましたけど、実際の話を聞きますと、ボストンバックの一番下に、一冊ずつ皆分担して持つて帰つて、もしそれが見つかったら本間先生が全部自分で責任を取るということだったんですね。三好(章)先生おつしやつたようにちよつとチェックがラフだったんでしょうかね。その結果全部、学籍簿、成績簿を持つて帰ることができました。私がこの研究を始めた30年前あるいは20年前ぐらいまでは、全国からこの人は書院の卒業生というけれども本当かどうか問い合わせが沢山きました。そのほとんどっていうか、100%は

学歴詐称だったんですね。非常に有名な人も今そういうことやっている人おられますけど、もう今は第一線を皆さん、退かれた方々だからそういう問い合わせは今ありません。それが真ん中のガラスケースのところに並んでるんですね。

ちよつと見にくいですけどこういう部屋があります。孫文関係展示の部屋ですね。

孫文、これもお話すると長くなってしまうかもしれませんが、山田良政っていう津軽藩出身の方が、孫文が一斉蜂起をハワイで呼びかけ



た時に広東近くの場所へ早馬を飛ばし、台湾から武器を運ぶ約束で、革命戦争をやるというような連絡をしようという手はずになつてたんですけど、台湾総督がそれを拒絶したものですから、失敗してしまつて本人も現地で亡くなつてしまふんですね。展示にもありませんけれど、馬に乗つて、そのダメになつたという連絡に走っている山田良政の姿の銅像が今、中国に建てられたんですね。その関係者がこの前現地へ行ったら、地元で大歓迎を受けたと現地の新聞に大きく載つたんですね。彼は、孫文を支えた外国人の死亡者第一号です。その弟さんが正面の孫文の左側の純三郎さんというんですけど、この方がそういうお兄さんの意志を継いで孫文の実質的な秘書をやつたんですね。従つてこの方の下に沢山の生資料が集まつてきました。その資料を息子さんの順造さんという方、この方もやっぱり書院の卒業生ですけど、孫文の総合博物館を造るという構想を持っていたんです。体調悪く中々実現できないということもあつて、愛知大学に一括寄贈していただいたんですね。日本では孫文博物館というのが華僑の人たちによつて神戸につくられていますけれど、あちらはほとんどコピーばかりなんです。それに比べますと本学は、こういう経過がありますので、ほとんど本物なんです。その史料の数はやはり日本で一番多いと思うんです。そのために展示室を二部屋分作つて展示してあります。



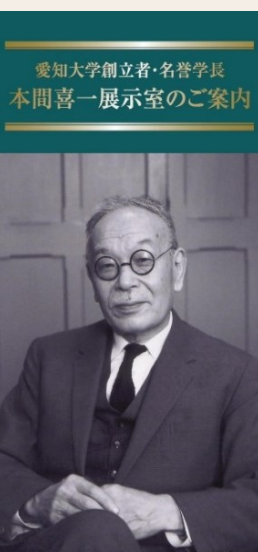
す。歴史的な非常に貴重な資料が多いのです。こういう孫文関係の部屋もございます。これも、その一部ですね。一番右上は、晩年の純三郎夫妻ですね。その左手のほうには戦争に敗れた上海で、日本人は一か所にまとめられてしまふんですけど、純三郎自身は日中間の親友として特別扱いにされ、街を自由に歩いてよろしいというような許可書をもりますが、それが展示してあります。

次のスライドですが、これは戦後の愛知大

学の兵舎の寮ですね。寮の一部をこういうかたちで復元したんですけど、愛知大学の卒業生が時々見学にやってくるので、俺たちはこんな綺麗な所で生活したかった。壁の板をむしり取って、薪にしたとかですね。そういう話を色々されるんです。ここには、実際の当時の学生の方々が授業中にとったノートも展示しています。戦後は学生が勉強に飢えていたと思うんですね。非常に熱心に綺麗にノートをとり勉強に励んだ様子がよく分かります。これは、本間先生の部屋ですね。実質、愛



知大学を創られた人物ということで、我々としても早稲田大学の大隈重信の展示室みたいなかたちで一部屋作りたいということで、本間先生を記念すべき部屋を作りました。これは、オフィシャルな部分というよりは私的なプライベートな部分です。娘さんの、晟子（あきこ）さんという方が、かなり本間先生の遺品を持っておられて、それを少しずつ提供していただいて、一部屋分作ることができました。本間先生のパンフレットの後ろ側に掛け軸があります。一幅しか今出してありませんけど二幅あるんです。これは、アヘン戦争の時の林則徐が書いた直筆の書です。民放でなんでも鑑定団っていう番組がありますね。豊橋でもやった時に、愛知大学に一品出してくれて来たんですね。出すのはこれしかないだろうと思ったけれど、ふと待てよと。こんなの日本中に知らせたら狙う人が出てくるかもしれない。愛知大学では、そういうのがあって値段がつかれてもちよつと困るなということで、お断りしました。しかしこれも、中国の人たちが来て盗られたらどうするんだ、皆来て同じことを言うんです。中国の方はいいと思ったから強引に盗って行く。そういうことがあるようですね。そこで我々としては、早速レプリカに変えて対応しました。しかし、日本の技術はすごいですね。本物かレプリカがよく分からないですよ。裏側にメモしておかないと分からないくらい良くてできてます。そういう物も展示してあり



ます。本間先生が非常に中国の方と親密なコミュニケーションがあつて、戦争に敗けた時もありとあらゆるお金は紙になつてしまう。第一大戦後のドイツに留学した先生ですから、一千倍にもものぼるインフレの経験の中で生活した人ですから、すぐ色んな物、車に変えたりガソリンに変えたり、食料に変えたりして対応した方でありました。あるいは、金の延べ棒にしたりした。その金の延べ棒を中国人に預けたけれど、預けたら帰って来ないんじゃないかと普通思いますけど、信用関係をもとに、

信賴する中国人の人に預けて、帰国のための資金にしていたということでもあります。尚、書に関しては本間先生がその前に、一回日本へ持ってきた時に一緒に持ってきたということですのでここに飾ることができたということです。色々、歴史的な事実や色んな背景があつて、非常に面白い歴史の展開がわかります。

そして、もう一つ。キャンパスの北方にも師団司令部の建物がありました。師団長が泊まっていた官舎、師団長官舎ですね。師団長は白い馬で朝晩キャンパスへ往復していたという話ですけど。これは、洋室。右半分はちよつと写っていませんけど、和室のミックス型です。現在これが残っているのは新潟県の高田と福岡県の久留米、合わせて三ヶ所だけです。新潟県の高田の旧官舎は町役場の建物を引っ張つてきて、それを使っています。それから、久留米のほうは純粹日本和風の建築です。洋風はここだけなんです。最初、愛知大学が出来上がった時に市内も焼けたばかりでホテルがありませんから、全国から来られる非常勤の先生たちにここへ泊まっていたいたのです。それから、本間先生とか、教員の方々もここで泊まられて、学生の色々な生たちもここへ夜押しかけて一緒にご馳走になったり、議論をしたりした。そういう憩いの場所であつたわけです。しかしその後、この建物も使われなくなつて、少し朽ち果てる様子が出てきたものですから、もう一回これを再生して、市の



文化財も含めてもつと評価してもらいたいということ、少し前にこれの見学会をやりました。それが次の写真ですね。二日間やりましたけど、延べにして約千人近くの人たちが押しかけて来られました。改めてこういう建物はそういう価値があるのだと、多くの人たちが関心持っているんだなと思つた次第です。写真の上のほうの部屋は洋室の部分ですね。こちらは和室ですね。愛知万博の時にここを思いつき改修して、豊橋市の迎賓館として利用したらどうかっていうわけで、地元の経

済界の方々が三億円出すからというお話をしたので、わつ、すごいと、これは面白くなりそうだなと思つたんですが、その方はそのまま東京行つてホテルで亡くなつてしまつたんですね。何も遺言は書いてありませんでしたから、だめになつてしまつたんですね。それで、今はこの建物どうするかつて、佐藤学長がおられますけれど、現在、市のほうとどういふようなコラボレーションをやるのかというような相談を現在していると聞いております。そういう点では面白い、貴重な建物で、明治の最初に豊橋の、先ほどの師団長の本部の建物もそうですけど、豊橋の土工の人たちが全国を回つて、洋風建築の技術を勉強して初めての洋風建築を豊橋で造つた。そういう記念すべき建物でもあります。これは我がセンターの運用していますホームページです。

ここにおられる森(健一)さんがパソコン技術を駆使して、動画を含めてここで今展開を始めました。一度帰られたらパソコンでご覧になつただけとありがたいと思います。ということ、以上です。

有森 孫文からの密書が岡山の犬養木堂記念館にあります。「広州陥落は間近だと。ついで、小銃一万丁、野砲十門を台湾經由密送してほしい」という内容のものです。木堂(犬養毅元首相の号)さんは東亜同文会にも所属され、清廉潔白な政治家として有名でし

た。今日、犬養木堂の書を持つてきており、これはセンターにそのまま寄付しようと思つています。単なる書ではなく、「偽善の仮面を剥ぐ、虚喝の舌根を抜く」(見せかけの善行の面目を剥ぎ、うわべだけの威勢ある脅かしの舌の根を抜く)という書です。これは政治講演会とかで使ったものだろうかと思つてゐる次第です。ただ、通常の書を書いてゐるもの以外で、こういうものを見たのは初めてですので、やはりそういった同文会に所属してた犬養らしい、徹底して政府を攻撃するイメージがうかがえます。傷んでるんで、これは改修するのは大変と思いますが、役に立つ資料ということで寄付いたしました。広島は広島東洋カープが



ございますが、広島東洋カープはオーナーのいない球団です。愛知大学も全国で珍しくオーナーがいない大学です。ですから、所属してる学生OBは母校を盛り立てる義務があると思つてゐるのは皆さん一緒だと思いますので、私もこういう形でできるところはさしていただいております。同窓会活動のほうでこれからも頑張りますが、愛知大学のほうでも、2月18日の梅花忌とかの行事は、記念センターがそういった行事を主催して後世に伝えていくとかしていただいたほうが、根津先生、本間先生の遺志を正しく後世に伝えることができ、望ましいのではと感じております。ご清聴いただきましてありがとうございます。

司会 ありがとうございます。私から一言だけ。記念センターでは毎年『同文書院記念報』という出版物を刊行させていただいておりますが、今お話いただいたような収集資料については本誌では「資料紹介」としてまとめ、報告しております。また、さきほど藤田先生が仰られた師団長官舎の見学会については、2年前にちょうど築後100年を迎えたので、大学理事会にて提案を申し上げた上で特別展というかたちで開催させていただきました。やつてみると予想以上の反響ですね、その時に約300名の方にアンケートいただきましたので、これを特別展の内容とあわせて『同文書院記念報』にて紹介させていただきます。

した。さらにその内容にしましては、今年度内に別途出版物の刊行を計画しております、現在準備中でございます。

それでは長くなりましたけれども、最後に今日の講演会ですけれども、最後の挨拶に東亜同文書院記念センター長の三好のほうからご挨拶申し上げます。

三好 どうも本日はお忙しい中、長時間に渡りましてお話を聞いていただきましてありがとうございます。こちらのOBの方々に支えられながらこの大学、同文書院との流れをくみながら今後も運営していかなければいけないということを思い新たに致しました。なかなか豊橋までお越しになるの難しいかもしれませんが、是非ともお運び頂きまして書院の展示物等々ご覧頂ければと思います。また皆様方の中に書院の関係者がいらつしやいましたら、その書院の関係者が遺された物などお目にかけていただければ、我々のほうでまた参考にさせていただきたいと思っております。是非よろしくお願い致します。本日は長時間ありがとうございました。



書籍のお求めは、(株)あるむ[tel(052)332-0861]もしくは各書店まで



知を愛し、世界へ。

東亜同文書院大学から愛知大学へ

1901(明治34)年、近衛篤彦(民族復興)や松澤一らが日本最初の海外高等教育機関として中国上海にビジネススクールを設立した。それが東亜同文書院(1939年に大学に昇格)である。アジア支配を進めていた自欧列強に対抗するため、日中両国の経済提携と書院友好の促進をめざし、画期的なビジネス実務教育システムが設定された。

その一つは、自力で実務をこなせるだけの中国語と英語の習得。もう一つは、実務にとどまらず貿易取引の仕組みや商品などの調査をおこなって中国の現実に

知り、中国人への理解を深める大調査旅行であった。1945年(昭和20)年、敗戦とともに東亜同文書院大学は45年で幕を閉じた。最後の学友、本館第一は、後継「国際的教養と視野をもった人材の育成」地域社会の発展を日本国内に示すことを指示する一方、東亜同文書院(大学)卒業生・在校生5,000名の学難簿・成

績簿を教職員・学生の個々のリュックサックに入れて持ち帰らせた。

こうして1946(昭和21)年11月15日、愛知大学は本開業一、小岩井清、神谷龍男、木田三雄をはじめとした東亜同文書院大学関係者が中心となり、愛知県豊橋市の旧陸軍第15師団跡地に、中部地区で唯一の旧制法文系総合大学として設立された。そして、東亜同文書院(大学)の学難簿・成績簿も保管された。

愛知大学の「愛知」は、「智=知を愛する者が集う」を意味し、設立趣意書には、戦後創立された日本の大学としては画期的な「世界文化と平和への貢献」「国際的教養と視野をもった人材の育成」「地域社会への貢献」が示されている。新たな時代への決意と



愛知大学記念館/旧陸軍第15師団司令部庁舎(登録有形文化財第23-0009号)



Designed by Katz.





愛知大学は1946年に中部地方において、初めての法文系大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は、第二次世界大戦前、海外にあった日本の高等教育機関であり、とりわけ中国の上海にあった東亜同文書院（のちに大学）が中心となりました。

東亜同文書院大学記念センターは、1993年に設立して以来、本学の「生みの親」ともいえる東亜同文書院大学の総合的研究と、書院を継承した愛知大学史の研究を進めており、その成果はシンポジウムや紀要、ブックレットにて発表してきました。

現在は、文部科学省の研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受け、2012年から5年にわたり、5つの研究グループのもと研究を進めています。

研究活動のほか、センターがある大学記念館には本学の歴史などを紹介する展示室があり、見学者への案内・解説もしています。来館者数は年間3000名を超え、本学学生のほか、高校生や国内外からの研究者など、広く来館いただいています。来館者の中には史資料を寄贈くださる方もおられ、整理・保存活動も行っています。

センター事業に賛同をいただけた、東亜同文書院大学・愛知大学に関する資料等を提供いただける方は、当センターまでご連絡ください。さいますよう、お願いいたします。

大学記念館／東亜同文書院大学記念センター
連絡先 0532-474139
開館時間 10時～16時
休館日 月・日・祝日・大学が定める休日

国際シンポジウム

- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中関係史の中の東亜同文書院」
「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかかわりをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

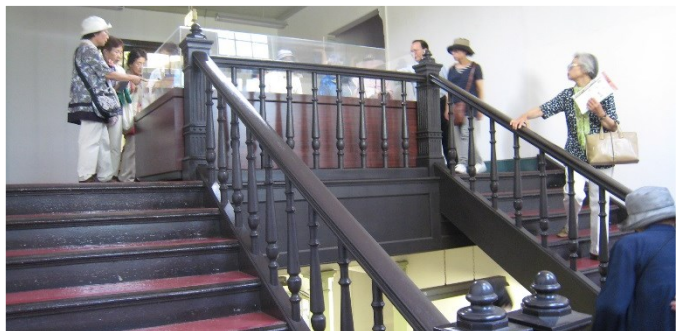
展示会・講演会

- 2014年 広島 2010年 京都
- 2014年 岐阜 2009年 神戸
- 2013年 長崎 2009年 シカゴ
- 2012年 沖縄 2008年 福岡
- 2011年 富山 2008年 弘前
- 2010年 名古屋 2007年 東京
- 2010年 米沢 2006年 横浜

出版物

- ・同文書院記念報 (vol.23まで刊行)
- ・ブックレット (第8巻まで刊行)
- ・愛知大学創成期の群像 など

スタッフ紹介



愛知大学東亜同文書院大学記念センター



愛知大学東亜

検索